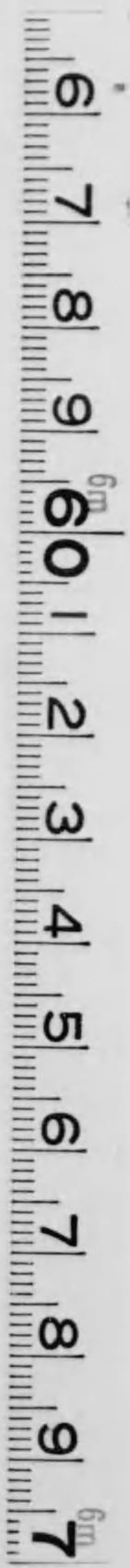


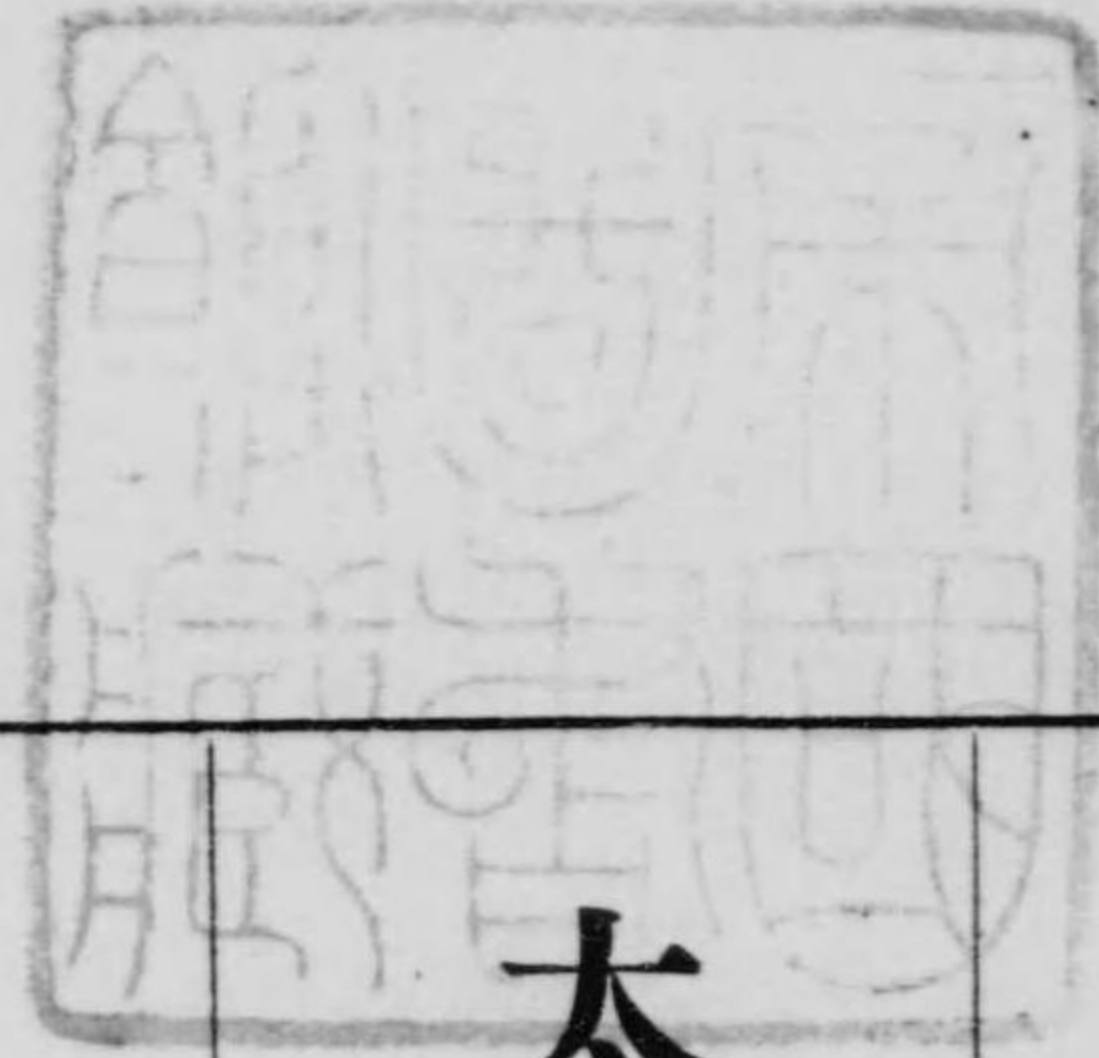
398
38



始



398-38



赤木 桁平 著

太子所行讚

東京 大村書店刊行

大正
10.10.6
内交

此小冊子に於いて、著者は、著者が信じて我歴史的人物中の最高、最美な典型であるとする聖徳太子の人格と業績とを、能ふかぎり簡潔に叙述しようとして考へた。日常のツリヅイアルな實務に追はれて、心のまゝに浩瀚な史傳などを繙く餘裕のない人々にとつて、此種の企ては、必ずしも無意味なことではあるまい。従つて、此小冊子には、當然必要であると思はれる考證や説明のすべてが省略されてゐるが、此小冊子の如何なる部分に現れてゐる斷定でも、一として著者の嚴格な論理的乃至事實的反證を根據として生れて來ないものはない。その點から云ふと、著者は、此小冊子を安心して讀者諸君の几上に奨めることが出来る。併し、讀者諸君の要望するところが、聖徳太子の人格と業績とに對する

より以上の細微な考察と、廣汎な知見とにあるならば、どうか著者が目下執筆中である『飛鳥文化の建設者と其時代』と題する書物の出版まで待つて頂きたい。その書物に於いて、著者は、此小冊子が讀者諸君に與へるであらう不滿の大部分を、十分に補填し得るに相違ないと信じてゐるから。

大正十年八月盡日

著者

内 容

一 序 説	一
二 傳説の太子	六
三 太子の生誕	一一
四 太子の時代	一六
五 少年の太子	二一
六 保守派の滅亡	二六
七 佛敎的感化	三一
八 太子の執政	三六
九 新羅討伐(上)	四一
一〇 新羅討伐(下)	四六

一一 遣 隋 使	五二
一二 冠位の制定	五六
一三 憲法十七條(上)	六一
一四 憲法十七條(下)	六六
一五 實際的施設	七一
一六 太子の改革と大化の改新	七六
一七 太子の性格	八一
一八 經典の講讀	八六
一九 三經疏の制作	九一
二〇 佛寺の建立(上)	九六
二一 佛寺の建立(中)	一〇一
二二 佛寺の建立(下)	一〇六

二三 學術文藝の勃興(上)	一一一
二四 學術文藝の勃興(下)	一一六
二五 移植文化の内容	一二一
二六 太子の周圍	一二六
二七 太子の死	一三一
二八 結 語	一三六

太子所行讚

一、序 説

赤 木 桁 平 著



西の埃及と東のカルデアとが孤立した二つの寂しい惑星として太古の暗黒なる世界を輝らした時代から、極東の一帝國が文化の曙に達するまでには、地球は幾たび回轉したか分らない。その間に人類は驚くべき貢獻をした。地中海の岸に咲いたヘラスの文化は云ふまでもない。印度の森から生れた吠陀の詩や、パレスチナの民衆の間に萌芽した猶太の宗教や、アレキサンドリアの學術や、支那や羅馬の大帝國など、世界史の上に不滅の足跡を貽しつゝある時代には、我々の祖先は。

未だ深い眠りの中にあつて、桃源の民に適はしい幼稚なる平和を楽しんでゐた。

彼等は多分極めて單純なる神話と、純潔を尙ぶ風習と、農耕にいそむアブラハムの時代のやうな若々しさとを持つた民族であつたらう。原史時代の愛すべき遺物たる埴輪を見ても、彼等は好んで武装したらしいが、其嚴めしい甲冑の下には、人生を楽しむものゝ微笑と、人生の惡を知らないものゝ天真とが隠れてゐる。彼等の外部生活は、假令ミクロネシアの蠻民のそれにも劣らないやうな程度にあつたにしても、彼等の内部生活の奥底には、未だ發見されない鑛脈のやうな卓越した素質が潜んでゐて、それを採掘する『偉大なる手』の一日も早く現れんことを待つてゐたに相違ない。

想像の翼を借りて我々が古代史の暗黒なる道を僅に手探りに歩い

て來ると、神武帝の奠都や、崇神帝の國家統一や、神功皇后の海外遠征などに依つて、我々は國民的文化の夜が漸く曙に近づくことを感知しないではない。その間には西方から流れ込んだ大陸文化の小さな氾濫もあつた。當時の權力階級の一部には、多分其異常な刺戟によつて昂奮した先覺者もあつたらう。應神帝の太子菟道稚郎子の如きは、慥にかやうな先覺者の一人であつたらしい。韓半島との頻々たる交通や、わざと、吳國に使を送つたことや、國內から徵發した船舶を悉く武庫の水門に繋いでゐたやうな事實は、此聰明な太子の胸臆に包まれてゐた意圖のかなりアンビシアスであつたことを語つて居る。併し、かやうな先覺者の努力も、長夜の惰眠に馴れた我々の祖先を策勵して、彼等を人間生活の發展と向上とのために覺醒せしめるだけの効果はなかつた。弛緩した神經を引きしめ、憫れた感覺に尖鋭なる力を注ぎ込ん

で彼等が心ゆく限り黎明の新鮮なる大氣を呼吸するためには、猶ほ多少の時日を要した。

雄略帝の治政から欽明帝の治政に至る間に於いて、機運は加速度を以て近づいて來た。

織匠や、醫師や、學者などは斷えず漢土から歸化した。支那や朝鮮の布教僧等が竊に渡來して、民間に傳道を始めたのも、かなり早い時代の事であつたらう。任那問題のために幾度となく對馬海峽を往復した將卒等が、我國の朝野に對して如何なる影響を與へたかも看過してはならない。何れにしても、長い間我々の祖先の臥榻を包んでゐた暗黒の幕が段々引き絞られてゆく此時代の有様を見ると、我々は將に開演されんとする花々しい戯曲の演出を待つやうな一種の緊張を感ぜざるをえない。美しい民族の曙、美しい文化の黎明ともいふべき推古朝

の燦爛たる治政は、暗黒の幾十世紀を過去の悠遠なる夢と化して、漸く我々の祖國を訪れたのである。

そこには無知や蒙昧の暗黒の下に長夜の惰眠を貪りつゝあつた人々が俄然として眼覺め、恰も太陽の赫々として昇騰するにも似た華かさを以て上界に躍り出た壯觀があつた。そこには又、民衆が自己の裡に内包してゐる潜勢力を唯一の個人に凝集して、無限の力を揮ふた偉大なる創造の舞臺があつた。時代を超越する精神と、時代の求めるところを辨知する叡智と、時代を正しい方向に導く勇氣とを以て、此光榮ある世紀を開すべき先覺者としての高貴なる使命を果したものは抑何人であつたか。——わが聖德太子の人格と事業とは、我々の民族が世界史の一角に不朽の名を留める限りは、永久に人類の記憶から拭ひ去らるべきものではない。

二、傳説の太子

古代のあらゆる偉大なる宗教的人格と等しく、聖徳太子は長い間眞實を隠す一種の傳説的不明瞭の中にあつて光り輝いてゐた。太子の傳記が傳説の集成であることは、佛陀の傳記が傳説の集成である事と多く選ぶところがない。いはゞ太子に關する數限りない文獻は、太子の人間を裏書する眞實性を蔽ふて、傳説の暗闇に封じ込まうとするために浪費された紙數のいかに莫大であつたかを示すものに外ならぬ。太子に關する傳説が、如何なる時代に、如何なる人の手に依つて、如何なる材料から作爲せられたかと云ふことは、太子の人格と事業とが時代に反射して投げた意識の影を見出すためには、必ず穿鑿されなければならぬ。併し、それらの繁鎖なる考證に費すべき紙數の餘裕を持

たない私は、茲には唯だ太子の生前に夙くも『聖王』の名があつたといふ事實に據つて、實在の太子が傳説中の人物となるためには、極めて僅かの時日を要したに過ぎないであらうといふことを指摘して止みたい。太子の死を去ること漸く一世紀を出でない時代に編纂された日本書紀の筆者の頭腦に、太子の人格と事業とが如何に映つてゐたか。書紀の編纂よりも猶古きに溯るであらうと思はれる一僧侶の手記の内容が、推古時代の尊むべき記録の中に如何なる要素を混へてゐるか。それらの事實に就いて正しい理解さへ失はなかつたならば、何人でも直に私の決論に對して同意することは疑はない。

過去の傳記家は皆同じ誤謬を繰返した。如何にして太子の偉大を後世に傳へんかのために焦慮した揚句、彼等は古來の聖者や、賢人や、名君などの類型に依つて其容貌を描き出さうとした。單調なる輪廓の

美を複雑化するために、善意の捏造が大いに有効であることを妄信しても、其善意の捏造が、全體の効果の上に悲しむべき影響を來たすことに考へ及ぶものはなかつた。その結果は近づきがたい圓光の崇嚴に依つて、我々の地上から引き離された一個の超人があつた。彼は我々に許されたあらゆる崇高なる觀念の傀儡であつた。従つて、我々の想像の中に生きてゐる聖徳太子と名附ける人格と分離して考へえられない慈悲や、愛撫や、信仰の輝きに充ちてゐたであらう其眼も、豊かな情感を支配して力強い生の鼓動を暗示したであらう其心臓も、我々にとつては、總てが皆硬化した過去のミイラとして印象するに過ぎなかつた。動もすると、正しい理性が傳説の太子を否定して、我古代史の最も光榮ある頁から面を背け様とするのも強ち理由がないとは云へない。今日は、我々の理性が是認する範圍に於いて、十三世紀の以前に於け

る太子の人格と事業とが持つてゐる意義に就いて、正しい評價を下すべき時代である。過去の人々に依つて與へられた多くの誤つた尺度を否定して、太子の眞實を計量するためには、いさゝかの斟酌もあつてはならない。虚誕なる傳説のために傷はれた太子の『完璧』を復原することが、我々に残された愉快なる義務であることを自覺する上は、假令我々の叡知や感情が曇らされてゐたにしても、我々は決して太子の眞價を誤認するやうなとはあるまい。色々の雲影が大山の麓を蔽うても、その頂點に依つて、我々の眼は正しい高度を量り得るのである。併し、廣さと深さとに於て限らない太子の人格と事業とをあるがまゝに描き出すことは、我々にとつてかなり難かしいことである。我々の想像の中に活躍する太子の心象を具體化するために、我々は其心象の各部分を組立てた如何なる要素に就いて最も心を留めたいか。

高貴なる帝權に包まれた驚くべき行政の能力は、崇嚴なる法悦に充たされた力強い覺者の魅力と纏絡して、斷えず我々の前に釋きがたい謎を投げてゐる。嘗て太子の像を描かうとしたものが、肉身の太子を正視するに堪へずして、結局水に映つた姿を描くより外はなかつたといふ傳説のやうに、此釋きがたい謎を釋かうとすることは、要するに一つの影を捕へることに過ぎないかも知れない。

三、太子の生誕

正史の或る暗示を裏切つて、より信すべき舊記は、聖德太子の降誕が敏達帝の三年甲午の歲であることを傳へてゐる。正確なる月日は判らない。

佛陀の父首圖駄那が王號の所有者であつたといふことは、最近の研究家の疑ふところとなつてゐるが、如何なる時代が來ても、太子が我皇統の出であることを否む史家はあるまい。更めて云ふまでもなく、太子の父君は橘豊日尊（用明帝）であつて、母君は穴穗部間人皇后である。何れも大族蘇我氏の出たる欽明帝の妃嬪の腹に宿つた皇子女であるから、太子は正しく異母兄妹といふ近親結婚の間柄に生れた皇子である。系譜上の事實から云つて、私は太子の血管に流れてゐた神武

帝以來の正しい皇統を稟けた血の中には、極めて多量に純粹な蘇我氏の血が混流してゐたといふことを特に注意して置きたい。

茲に私が語らうとする時代の大和川の平原は、最古の大和民族の政治、宗教、藝術、其他の文化形式の最高中心部を其内に包んでゐた。古代文化の生命が最も活潑に躍動した有力なる泉源は、此河畔の一小平原を中樞として四方に流れて行つた。麗かな春の日を畝傍から飛鳥への道を生んでゆくと、見渡す限り一面に麥や菜種に彩られた田園や、灌木の簇生した丘や、古塔の聳えた廢寺や、溪流や、山陵などは、彼等の閱歴が如何に光榮に蔽はれてゐるかを告げようとするが、忘却に囚れ易い我々の記憶が十餘世紀の過去に遡つて、飛鳥藤原の盛期を眼前に髣髴させるといふことは、必ずしも容易なことではない。併し、現實の情趣が如何に我々を過去と追懷とから引離さうとしても、我々は此靜かな

る平野の一角が、正しく『太子繪傳』の第一圖を形作るものであることを忘れてはならない。

今飛鳥の地を訪ねるものは、嘗て推古帝の皇居があつた豊浦から南に當つて岡といふ小さな部落のあることを知るであらう。此小さな部落を右に折れて礫の多い坂道を凡そ二三丁もゆくと、赤松の茂つた小高い丘陵の麓に沿うて、橘寺といふ古刹がある。小さな寺ではあるが、眺望は中々美しい。東方には脚下を洗うて流れる飛鳥川の愛すべき溪流を越えて向うの山腹に龍蓋寺（西國七番岡寺觀音）の甍を眺め、西南には、廣々とした耕地の間に點在する飛鳥附近の農村や、諸帝王の山陵や、種々の傳説によつて名高い大和の三山などを前景として、其背後に屏風の如く聳り立つた葛城山脈に屬する諸峰の雄渾な姿を見ることが出来る。寺は佛頭山上宮皇院と號し、用明帝の離宮の古址で

あると云ひ傳へてゐる。我々の太子は多分此處の宮殿で降誕したものであらうといふ先輩の考證があるが、根據ある想像として、私は無條件に此の説を受け容れたい。——此寺の現今の本堂は太子殿と稱して、太子の勝鬘講讚の木像を本尊として祀つてゐる。

太子の降誕の宮が橘宮であつたとすれば、太子の幼年時代の大部分が、すこされた所謂『上宮』は何處にあつたであらうか。歴史の空隙に乗じて多くの臆説を容れるべき餘地はあるが、私は『上宮』といふ言葉を用明帝の皇居であつた池邊雙槻宮の上殿といふ意味に解して、それを現今の櫻井町に屬する一地名として残つてゐる上の宮附近にあつたものと考定したい。此地は現に池邊宮の故地として認められてゐる安倍村池之内から僅に數丁の距離にある。多武峰に通ずる山道から西に方つて小高い傾斜地が眼界を狭めてゐるが、まばらな濶葉

樹林と、僅少な耕地とが交錯してゐる其の頂上のあたりに瀟洒なる上殿があつて、近く池邊宮の雙槻が亭々として青空に聳えてゐるのを望見したとしても、あまり事實を誣ひた想像ではあるまい。

何れにしても、上高家附近の高地を中心として約二千米突を半徑とする圓を描くと、太子の前半生に最も因縁の深い地名の大部分は、その圓周の内に包擁することが出来るらしい。

四、太子の時代

太子の業績の價值と意義とに就いて正しい理解を得るために、此時代の世界年表（シクロロニスム）を擴げて見るといふことは、必ずしも無益なことではあるまい。

太子の生年である敏達帝の三年は、恰も陳の宣帝の大建六年に當り、太子の歿年である推古帝の三十年は、唐の高祖の武徳五年に當つてゐる。西暦で云ふと、太子の在世は五七四年から六二二年に亘つてゐるから、大體に於いて、ランゴバルト王國の興起からイスラム教國の紀元に至るまでが、太子の活動時期に相當してゐるものと考へていふ。――豫言者マホメットの生誕は、太子のそれを距ること僅かに四年前であつた。

此時代の支那は後代の詩人によつて『六朝夢の如く鳥空しく啼く』と謳はれた燦然たる金陵の文化が靡爛して、既に頽廢に陥つた時期であるが、豪華に馴れた歴朝の帝王は、相率ゐて美しい園囿や、莊麗な宮殿や、雄大な土木を起した。宮廷の奨勵に應じて咲き亂れた藝術の花は、繪畫や彫刻や文學の上にも不朽の一時期を劃して、其滔々たる文化の流れは、我對岸の半島國をも浸涵したらしい。美しい壁畫に依つて飾られてゐる所謂高句麗時代の古墳が、假令六世紀以前に遡るにしても、猶ほ此時代に漢人の文化が如何に韓半島を光被したかといふことの徵證にならぬことはあるまい。

支那がかやうな有様であつた時は、同じく北方印度の黄金時代とも云ふべき時期は過ぎ去つてゐた。併し、嘗てカリダーサの文學や、錫蘭のシーギリアの壁畫などが榮えた美しい笈多王朝の盛期は、未だ其華

麗な夢を留めてゐた。驚異すべきアジャンタの壁畫の或物が、第一チヤルリヤ王朝時代のものと比定されるといふことは、佛教に代つて印度教の勢力が遍ねく全印度に行き亘つてゐた時に於ても、前代から引續いた藝術的文化的餘燼が尙ほ盛んであつたことを證明するものではあるまいか。何れにしても、有力な波羅門が衰殘に瀕した佛教徒を窘窮して印度教の復興を畫してゐた時代が、恰も我飛鳥朝から奈良朝にかけての佛教興隆時代に當つてゐることを思ふと、何人と雖も多少の感慨なきを得まい。

所謂『セレスの絹』として希臘人の頭腦に古代の支那人が印象したのは極めて古いことである。支那の冒險なる商人等が初めて葱嶺を越えて、遠く西域や印度に彼等の市場を索めたのは、果して何時頃であつたか分らないが、東西交通の發展が極めて迅速に行はれたといふ

ことは、太子の時代には已に南方印度洋を經由する航路が開かれて、紅海や波斯灣の上には支那船の帆影をさへ見たといふ事實に照らしても明かである。幾分誇大妄想狂の氣味がある情の煬帝が使を遣はして拂菻國（東ローマ帝國）に通じようとしたのも、當時の擴大された地理觀念から見ると、別に怪しむべきことではない。殊に、此の時代の支那商人等が珍奇な土産を驢背に載せて訪れた中央亞細亞の彼方には、尤大なる東ローマ帝國が其苦悶期にあつたことを看過してはならない。此時代の歐洲を評して、口の悪い史家は、宗教上の混亂や、政治上の亂脈や、知識上の麻痺を示す以外に何物もないと罵つてはゐるが、四方の蠻族が踏みにつつた廢墟の上には、ビザンチン文化の花が微かに咲いてゐた。此微かな文化の花は、南方から嵐のやうに押し寄せて來たイスラム教徒の兇暴なる荒掠の中にあつても、尙ほ彼等に固有の特

色を維持して、彼等の郷土を訪れた東方の旅客等に、すくなからず好奇の眼を瞪らしめたに相違ない。其點に遠く相隔つた東西の文化を、融合せしむべき契機が潜んでゐたらしい。わが飛鳥朝から奈良朝にかけての文化の内容を細密に點檢すると、我々は其處に此事實を立證する有力なる痕跡を發見するのである。

長途の旅に疲れた者の倦怠の色が世界のあらゆる部分を蔽うてゐた時に、太子の偉大なる事業が始まつたといふことは、果して如何なる意味を持つてゐるであらうか。太子の事業の世界史的意義——それを究明するところに、我古代文化史の最も重要な問題が潜んでゐると云つても好い。

五、少年の太子

我々の理性が否定する無数の奇蹟に依つて飾られた太子の少年時代に就いては、事實としては殆んど何事も分つてゐないと云ふのが正しい。

イエスの早熟を説いた路加を學んで、我々も亦皇子厩戸の怜悧を説いても差支へはあるまい。佛傳の作者が王子墨曇の身邊を包む現世の富貴を傳へるやうに、我々も亦少年の皇子厩戸の周圍を繞る地上の榮華を傳へえないことはない。併し、今一步を進めて、我々の太子が人となるべき初期に於いて、果して如何なる家庭的な空氣の中に生長したか、果して如何なる性癖の所有者であつたか、また如何にして其善に對する異常な銳感や、美に對する高踏的な本能を育てあげたか。心の

發達の歴史に於いて最も重要な役目を演ずべき其等の事實に就いて、何人をも満足せしめるやうな正しい答案を作るといふことは、到底我々の微力の及ぶところではない。殊に、かくの如く史料に缺乏した場合には、あつては、生活の表面を凝視して其底を流れる精神の活動を再現し得る藝術家の洞察のみが幾分の價値ある貢獻をなしうるものであつて、孤立する數多の命題をツギハギして、一ツの脈絡ある全體を形作るより外に能のない史家の註釋などは、何の役に立たう筈もない。

太子の師傅として正史の傳へた人物に博士の覺智と僧惠慈との二人がある。前者が百濟から來朝したのは太子が四歳の時であるから、此學者の手に依つて太子の教育が先づ儒教の經典から始められたであらうといふのは根據ある想像と云つて好い。併し、推古帝の三年に至つて初めて高麗から我國に歸化した惠慈と太子との間に一種の師

弟關係が成立つたのは、すくなくとも太子が二十二歳以後のことであるから、若し少年の太子に佛陀の深遠な教説を傳へたものがあつたとすれば、それは惠慈以外の何人かであつたらう。かなり大膽な推測ではあるが、少年の太子の手を引いて此の不可思議な神秘境に導き入れた最初の案内者は、多分當時南淵の坂田寺に居つた司馬多須奈若くは其の一派の佛僧ではあるまいか。當時の宮廷的儀禮は、決して兩者の接近を難するほど繁瑣なものではなかつた。

正史の記載に據ると、多須奈が初めて寺を南淵に造つて佛像を安置したのは用明帝崩御のときである。間もなく彼は出家して德齊法師と號した。太子が十四五歳の頃には、坂田寺は恐らく新しい教化の中心として、かなり大きな勢力を持つてゐたであらう。馬子の島の邸宅にも幾分の佛僧は居たであらうが、特に多須奈の坂田寺には朝鮮の歸

化僧などが澤山滞在して、當時造營中であつた我國最初の勅願寺たる巨利法興寺の建立に關與したことゝ考へられる。これらの佛僧が宮廷に親近して、皇子の教育の一半に鞅つたであらうといふやうな想像は、必ずしも無稽の造説とは云はれまい。敏達帝の十二年に日羅が大和朝廷を訪問した時、此遠來の巨人が幼年の太子に謁見して、其怖るべき未來を豫言したといふ興味ある傳説は、幾らか此邊の消息を漏らすものではあるまいか。

太子の生涯と切離して考へる事の出來ない人物に鳥佛師がある。わが美術史の曙を飾るべき不朽の名を貽した彼は、多須奈の子であるから、假りに太子と彼との間にあまり大した年齢の隔りがなかつたとすれば、此の未來の大執政者と大藝術家とは卓を共にして、同じき人の口から洩れる神秘的な世界の物語に耳を澄ましたやうなことがなかつ

たとも云はれない。怪しい莊嚴の裡に包まれた巨大なる殿堂の中に、幽かにゆらぐ薄光を浴びて佇んだ二人の少年を想像せよ。金色に輝く須彌壇の上から慈悲と圓滿とに溢れた瞳を靜かに彼等の上に落してゐる異國の偶像を仰いだ時、夢幻を追うてやまない彼等の心が如何に奇異な魅惑の内に顛へたか。——光榮ある我古代文化史の第一頁が、是れ等の卓越した少年に依つて彩られたといふことは、決して偶然なことではない。

六、保守派の滅亡

物部氏の滅亡と、崇峻帝の弑逆とは、太子の少年時代から執政時代に連る過渡期に於いて發生した二つの重大なる事件である。正しい史眼から云ふと、此の二つの重大なる事件は、假令其形に於て異なる所があるにしても、共に同一の原因に向つて歸着するのである。

欽明帝の治政の半ばに至つて、百濟の聖明王（西曆五二三年——五五三年）が初めて一軀の釋迦像と若干卷の經論とを貢獻した。『此法は諸法の中に於いて最も殊勝たり。解し難く入り難し。周公孔子も尙ほ知る能はず』と讚歎せられた佛陀の教説が、絶東の一帝國を驚かした時は、恰も此國の宮廷に於ける二大勢力の拮抗が漸く軋轢に變らうとする時代であつた。武内宿禰以來外國の文化に觸れ易い地位に

あつた蘇我氏と、代々攻伐の間に馳驅する役目を帯びてゐた物部氏とが、二つの異つた傾向の代表者として、磐余朝時代の政治史の上に幾多の悲劇を醸した事情の裏面には、單に氏族制度の悲しむべき結果として生れた大族間の政權爭奪に基く反目があつたばかりではない。宮廷の奥深く隠れた所には、皇位の繼承に關する暗闘があつて、此二つのものは、絶えず相影響しつゝ、後日の禍根を大ならしめたものらしい。併し、隱微の間に黙々として流れてゐた暗流が、一朝にして時代の表面を突破して大きな波瀾を捲起すに至つた最も直接の動機は、勿論佛教の輸入によつて刺戟された宗教爭議にあつたことは疑ふべくもない。

當時の開國派たる蘇我氏と、當時の攘夷黨の巨頭たる物部氏とが、此遠來の新宗教に對して如何なる態度を執つたかは、讀者の既に知悉するところであらう。宮廷に於ける宗教爭議が段々白熱化するに従う

て、在來の皇位繼承や政權爭奪に關する紛争は、すべて此問題を中心として生滅するに至つた。其處には二つのものゝ恐ろしい決闘があつた。我々の眼には、進歩と保守との噛み合ひとも見え、新しいものに対する古いものゝ反噬とも見え、又權略の上を廻る朋黨の殺戮とも見えるが、兎に角佛敎の渡來から約半世紀の間に於ける大和朝廷の歴史は、人間の本性の上に存するあらゆる罪惡や、虚偽や、功利や、信仰や、反感などが、如何に大きな力を以て時代を動かすかに就いて、此上もない敎訓を與へるものと云つて好い。併し、時代は間もなく鋭いカーヴを描いて急轉した。用明帝の歸依、中臣勝海の死、穴穗部皇子の誅に依つて段々に拾收に近づいて來た局面は、用明帝の二年に於ける澁河の役と、崇峻帝の五年に於ける倉梯宮の弑虐とに依つて、全く最後の段落に達した。前者が政權の爭奪に結末を與へたやうに、後者は皇位の繼承に結

末を與へた。運命は『進歩』に味方したのである。

或は殿堂を焼き、或は偶像を破壊して、此闖入者に新しい住家を與へまいと苦闘したものの、努力も終に水泡に歸した。恰もカタコムの深底から古い殉敎者に對する崇拜が起つたやうに、わが佛陀の福音は、或は守屋等の焼却した寺院の灰燼の中から、或は破壊した偶像の破片の中から、更に倍舊の力を持つて甦つて來た。わが古代史の上に生彩を點じた守屋の壯烈な死を思ふ毎に、私は彼が彼の死守した城砦の必ずや崩壊すべき運命にあるのを知らなかつたことを悲しまざるを得ない。彼は異邦の闖入者を防止するために最後まで戦うた勇敢な抗爭者であつた。彼の頑強な氣魄や、猪突的な精神や、鋭利な雄舌は、多分滿廷の群卿を壓して傍ら人無きが若くであつたらう。彼が初めて時代の急潮に抗する隻手の力の如何に弱きかに心附いだであらう時は、最

早彼は自己の悲劇に向つて一步を踏み込んでゐたに相違ない。彼に許されたことは、唯だ敗北者として潔く斃れることであつた。——滿腹の捷利に酔うて凱歌を奏する新しい時代の光は、彼の草むす屍の上に一種の悲愁を帯びて輝いた。太子の偉大なる統治が始まる前に、機運はすでに作られてゐたのである。

七、佛敎的感化

未來に於いて或偉大なるものが賭けられた少年の皇子厩戸の生活は、我々に對して限りなき興味を與へる。

敏達帝の末年から崇峻帝の一代ほど、我政治史の上に多くの變局を経過した時代はすくない。穴穂部の叛、物部氏の滅亡、崇峻帝の弑逆、それらの悲劇的な事件は、ある一つの『大團圓』に向つて急いでゐる演劇の急速な展開を促すに缺く可らざる場面として、恰も眼ま狂しいフィルムのように旋轉した。かやうな時代の旋轉が、皇子厩戸の少年時代の背景を形作つてゐたことは、特に記憶されなければならぬ。

私はしばしば書冊を手にして宮殿の欄干に凭れた彼や、綠樹の蔭に几座して深き思ひに沈んだ彼の姿を想像することがある。其時の彼

の頭腦を支配したものは果して何であつたらうか。此解しがたい少年の心の秘密を幾分でも覗きえたとすれば、それは彼の身邊に附き絡うてゐた博士覺智や多須奈の徒が、絶えず其耳に如何なる『夢』を囁いてゐたかといふことを諒解し得て後のことであらねばならない。

思ふに、覺智は常に六朝の燦然たる文化に就いて語つたであらう。そこには偉大なる帝國があるといふこと、完備した政治組織があるといふこと、華のやうな藝術があるといふこと、または偉大なる征服者や學者の事業があるといふこと。——博識な異國の博士が感激に満ちた態度を以て是れらの事實を物語つた時は、此少年の皇子にとつて最も充實した瞬間であつたに相違ない。併し覺智が囁いた『夢』よりも、一層力強く少年の皇子の心を動かしたものは、多須奈や多須奈の徒に依つて傳へられた靈界の異邦に就いての消息ではあるまいか。神秘の

幕に閉ぢられた深淵を暗示するやうな佛陀の幽玄な教への前には、燦然たる五彩の光を浴びた文化の殿堂も、卒然として其魅力を失ふやうな感じがあつたらう。此時代には玄奘は未だ印度の土地を踏んではゐないが、法顯や宋雲等の西域や印度に對する珍奇な見聞は、多須奈等の口に依つて、多分太子の耳にも這入つたことゝ思ふ。釋尊の生れ給へる國、少年の皇子の胸臆に旁午した夢想は、絶えず此未見の國を中軸として動いたことを忘れてはならない。

父君用明帝は、即位の後間もなく病に罹られた。帝は、當時先帝の殯宮に籠つて度ましく大喪に服してゐられた太后炊屋媛と、當時十三歳であつた皇子厩戸とを召して、病氣平癒のために法隆寺建立と薬師佛造像との誓願を發せられた。然るに翌年の初夏の候に帝は磐余河の河上にて新嘗の祭儀を行はせられたが、其時再び病をえて幾程もなく

崩御せられた。帝が大漸の床にあつて豊國法師から正式に佛教の洗禮を受けられた時には、多分幼年の太子も其席に臨んで、深憂に包まれた母君間人皇后と共に、父帝の回春を祈願されたことであらう。これ等の事情に依つて想像すると、幼年の太子に宗教上の感化を與へたものの中には、父帝の熱心なる信仰も與つて大いに力があつたらしい。法隆寺の東壇佛として名高い薬師佛の光背銘は、臍氣ながら其邊の事情に就いて一點の光明を投げるものである。

我々のコンスタンチヌスは、恐らくかやうにして少年の日を送つたであらう。殊に、其寶玉の如き天分が日とともに輝いて來るのを見落さなかつた周圍の或者は、其處に彼等の未來を支配する『偉大なる手』の存在することを豫感して、一種の戰慄を禁じえなかつたやうな場合がなかつたとは云へない。併し、眼前の世局を一轉して、前古未曾有の

偉大なる世紀を打開すべき使命が、よもや此早熟の一少年の雙肩に懸つてゐやうなど、は、何人が思ひかけようぞ。此點に對しては、少年の太子自身にもはつきりした自覺があらうわけはない。彼は唯だ彼の前途に何かしら形の定かなる或る大きなものがあつて、無限の果てに彼の到達を待ち設けてゐるやうに感じながら、其卓れた天分の完成に向つて急いだこと、思ふ。

八、太子の執政

時代の犠牲者として惨ましい最後を遂げ給うた崇峻帝の陵墓は、太子の上の宮から約四五町ばかり溪流に沿うて遡つた山道の傍らにある。蒲生君平が『地は溪間に傍うて甚だ隘し』と云つてゐるやうに、規模は極めて小さい。

倉梯宮の悲劇から約一箇月の間は空位であつた。其間に宮臣の眼は期せずして敏達帝の皇后豊御食炊屋媛の上に落ちたらしい。書紀には『群臣淳中倉太珠敷天皇の皇后額田部皇女に請うて踐祚せしめんとす。皇后辭讓す。百寮上表して勸進すること三度に至る。乃ち從ふ』とある。これが我國最初の女帝推古天皇である。——厩戸豊聰耳皇子が其太子として總ての政務を攝するに至つたのは、豊浦宮に於

ける新帝の即位を距つこと僅に四箇月であるのを注意しなければならぬ。

時代が思ひ切つた飛躍をする時には、思ひ切つた事件が起り易い。崇峻帝の弑虐が己に異例ではあるが、崇峻帝の弑虐に續いて起つた女帝の即位は猶さら異例である。皇祖以來不文の鐵則である慣習に悖つて、何故に女帝を立てねばならなかつたか、女帝なるが故に攝政が必要であつたとすれば、何故に攝政其人を帝位に立てなかつたか。疑問は疑問を生んで究極するところを知らない。其邊の真相を闡明するのも興味あることに相違ないが、茲にはさうした餘裕のないのを遺憾としなければならぬ。

厩戸皇子が攝政の重任を擔うて國史の表面に現れたのは二十歳の時であつた。長い間少年の頭腦に醗酵した無形の思想が流露して有

形の結果を齎さうとする第一歩に於いて、雙手に帝權を握つたもの、歡喜と決意とに充ちた瞬間を想像することは、難くない。併し、未だ醒め切らぬ青春の夢が残つてゐた太子の腦裏には、眼前に横はる現實の事象をありのまゝの姿に於いて映し出すだけの明澄な意識があつたらうか。色々の意圖は盲目的に動いても、其意圖の動くべき方向や性質に就いては判然たる自覺が伴はなかつたやうなことはあるまいか。私は推古帝の十三年の冬十月太子が初めて宮殿を斑鳩に造營された時期を中心として三十年に亘る太子の治政を前十年の準備時代と、後二十年の實行時代とに分ちたい。此準備時代の劈頭（推古帝の二年）に於いて、太子は所謂三寶興隆の詔なるものを發布して、取りあへず自己のラバラムの上に佛陀の名を明示した。尤も佛教に對する自己の立場は決定しても、此佛教を國家の統治策に對して如何なる位置に置

くべきかは、容易に決定しなかつた難問題であつたらう。

少年時代の研鑽に依つて、聰明なる太子は、早くも政治本位の支那から學ぶべきものが民衆統治の準則であり、宗教本位の印度から學ぶべきものが國民精神の深化であることには心付いてゐたに相違ない。従つて、支那の政府と印度の教會とを同時に採用することに就いては、熟考の餘地はなかつたであらうが、支那の政府と印度の教會とを同時に存在せしめて何等の矛盾もなからしめる方策に就いては、かなりの逡巡があつたと想像すべき理由がある。殊に、此企てが完全に行はれえたとにしても、其問題の奥には、さらに印度の教會を如何にして我國の神祇と握手せしむべきかといふ至難な問題が残つてゐる。此等の問題に就いては、幾度か覺悟や惠慈等に對しても、諮詢があつたであらう。燃ゆるが如き功名の念には、驅られても、中途の挫折を怖れたであらう。

太子には、少くとも五年や十年の準備時代は必要であつた。
推古帝の元年から五六年頃にかけては盛に佛寺の建立があつた。
八年には新羅の征討があつた。無論、これらの事業は太子の参畫する
ところではあるが、いはゞ前代からの繼續事業とも云ひ得べきもので
あつて、特に太子の心肝を痛めたものではない。太子執政の初期を以
て、私は其後年の大事業に對する草案や下圖を作ることに忙しい時代
であると考へたい。

九、新羅討伐(上)

太子の偉大なる統治は、先づ外征によつて初まつた。書紀には『八
年春二月、新羅任那と相攻む。天皇任那を救はんとす。是歲、境部臣に
命じて大將軍となし、穗積臣を以て副將軍とす。即ち萬餘の衆を將ゐ
て新羅を伐つ』とある。萬餘の衆は稍々受取り悪いが、兎に角かなり
の大軍が派遣せられたらしい。

韓半島の足だまりとして、今の慶尙南道の一部分が我國に隸屬した
のは、崇神帝以後のことであつた。神功皇后の征韓の時には、此地に内
官家を設けたといふ記載があるから、所謂任那府なるものに我國の重
臣が駐割して諸韓のことを統督したのは、かなり古いことである。爾
來任那を中心として、新羅と百濟と、我國との間に、色々困難な外交問題

が起つた。その根本的な原因は分らないが、任那はもと新羅の領土であつたから、この回復を熱望する新羅の陰謀と、これを維持しようとする我國の政策と、この兩者の間に介入して漁夫の利を占めようとする百濟の權略とが互ひに入り雜つて、多分種々の紛議を醸す素因を形作つたものと考へられる。我國から云ふと、任那は何分遠隔の地に孤立してゐることであるから、中央政府の威令も十分には行届かなかつたものと見え、任那に於ける我使臣は斷えず好點なる新羅の外交政策によつて翻弄せられたらしい形跡がある。殊に、繼體帝の六年に大伴金村と穗積押山とが百濟の賄を受けて任那の四縣を割讓した後には、新羅の回復慾は益々熾になつたものが、欽明帝の二十三年には、終に任那に侵入して我官家を滅した。帝は直に紀男麿を將軍として新羅を伐たしめたが、副將軍河邊臣瓊缶の遣口が拙劣であつたために失敗した。

此ことは大分帝の宸襟を惱まさしめたらしい。崩御の際に太子（敏達帝）の手を執つて後事を託し、『汝須らく新羅を討つて任那を封建せよ、更に夫婦を造すこと舊日の如くあらんには、死すとも之を恨みず』と遺詔せられた。

それ以來、任那の再興といふことは、歷朝の重大な政策の一つとなつた。併し、敏達帝の時には、百濟から日羅を招致して對新羅政策を諮詢する程度に於いて止み、用明帝の時も無爲に過ぎ、崇峻帝の四年の初秋に至つて、漸く外征の準備が整うた。將軍紀男麿、巨勢比羅夫等は、かゝりの大軍を率ゐて筑紫に駐屯すると、もに、他方には吉士磐金を新羅に遣はして折衝せしめた。倉梯宮の悲劇が突發したのは、恰も此時であつた。其ために問題は未解決のまま、推古帝の時に及んだわけであるが、帝の三年の秋七月に久しく駐屯してゐた遠征軍を召喚したとこ

ろを見ると、新羅に使した磐金の外交的手腕に依つて、此時は兎に角彼も任那の獨立を承認したものでらしい。五年の冬押詰つて、磐金が再び新羅に渡航したのは、多分すべての外交關係を決済するためであつたらう。

私の想像する通りに、一時でも新羅が任那の獨立を承認したとすれば、それは筑紫に駐屯して絶えず對岸の成行きを監視してゐた我遠征軍の威力を憚つたからである。従つて、わが遠征軍が筑紫から引揚げたといふ報知を耳にすると、反覆常なき彼は、直に軍備を整へて任那再侵の計畫を凝らしてゐたかも知れない。推古帝の八年の春二月に新羅が任那を攻撃したといふ事實は、誑詐に富んだ彼の面目を遺憾なく發揮したものである。此の飛報に接した大和朝廷の驚愕と憤怒とは如何にあつたらうか。恐らく民間のジンゴリズムも喧しいことで

あつたらう。累代の遺詔を全うする上にも、不法に蹂躪された我國の體面を維持する上にも、更に帝王として時代の民心を收攬する上にも、執政者の立場にあつた太子は、躊躇なく出兵を決意するより外はなかつた。殊に、應神仁徳の治政以后は、わが國民的自覺が最高調に達した時代であつた。長い間内に蓄へられた力が、外に向つて迸出しようとするところには、必ずや何等かの爆發が起らなければならぬ。聰明なる太子が、此間の機微を察しえないといふ道理はない。

十、新羅討伐(下)

境部臣と穗積臣との率ゐる遠征軍が韓半島の一角に上陸したのは推古帝の八年の晩春の頃でもあつたらうか。正史には『乃ち新羅に到つて五城を攻拔す』とあるだけで、悉しい戦況は判らないが、我軍は破竹の勢ひを以て、當時の國都金城に肉薄したものであつたらしい。敗戦の報に接して大いに驚いた眞平王(西暦五七九年―六一八年)は、多々羅、素奈良以下の六城を割いて和を乞うた。此講和の提議は直に豊浦宮に致されたものか、太子は媾和委員として吉師神及び吉師木蓮子の二人を彼地に派遣した。談判の結果、新羅は例の空々しい口吻を以て歸順を誓ひ、我遠征軍は凱旋することになつた。

此場合に於ても、新羅は例の常套手段を忘れなかつた。異郷の陣營

を撤して歸國の途に就いた我軍の將士等が、長閑な海上の旅で捷利の祝酒に酔ひ痴れてゐた時分には、彼は多分舌を出して我國の迂濶を嗤つてゐたであらう。書紀の筆者は、我軍の凱旋を叙する筆の下で、『新羅亦任那を侵す』と録してゐる。反覆幾回して、我國の奔命に疲れるのを待たうとする彼の狡猾なる底意は、愈露骨になつて來た。

太子が躊躇なく新羅の再征を決意したかどうかは分らぬ。我國の廟議が明かに其事を決定したのは、新羅が媾和條約を破棄した日から少くとも一年近く後のことである。太子が大伴連嚙を高麗に、阪本臣糠手を百濟に遣はして任那の救援を勸説せしめたのは九年三月の事であるから、同年の十一月に新羅再征の廟議が決定した事情の裏面には、かなり込入つた外交上の経緯があつたらしい。

翌十年の春二月に於ける新羅再征の擧は、太子の非常な決心から生

れたものであらう。特に愛弟來目皇子を遠征軍の總指揮官に任命して、諸國から徵發した大軍の將とした。間もなく來目皇子は筑紫に進軍して島郡に駐屯し、船舶を集めて輜重の準備を整へてゐた。然るに六月に至つて皇子は彼地に於いて病に罹られたために出發が遅延しつゝあつたが、翌年の春二月に至つて終に薨去せられた。間もなく後任者として皇子の兄當麻皇子が任せられて難波から發船せられたが、今度は皇妃舍人姫が播州赤石に於いて薨せられたので、當麻皇子は其儘引返された。——不可思議なことには、其後筑紫に駐屯してゐた遠征軍の始末はどうなつたものか、一切正史には記載がない。

併し、種々の事情から想像すると、新羅も任那に侵入しては見たものゝ、隣國高麗、百濟の形勢が何となく不穩であるのと、我國が大仕掛の遠征軍を筑紫まで送つたといふことを聞いたのとで、此際事を荒立てる

ことの却つて不利であることを自覺し、一旦任那に侵入した軍隊を引揚げ、我國に對しても他意なき風を装うたものではあるまいか。推古三十一年（太子薨去の翌年）に又『此年新羅任那を伐つ』といふ記載のあるところを見ると、此時まで任那は立派に存在してゐたといふことも判るし、又新羅が特に、太子の強硬な外交政策を憚つて戈を戢めてゐたらしいといふことも、十分想像されないことはない。

要するに、太子の新羅政策は成功に近い結果を擧げることが出来た。これに依つて歴代の重要な懸案も解決するし、我國の傷けられた體面をも恢復することが出来た。殊に、此偉大なる功業は、一般の國民的激昂をなだめて、彼等に新統治者の權威を承認せしめるためには、豫想外の効果があつたらう。太子の一代に於ける急激なる改革の中には、随分當時の民衆的意向と相容れないものも多かつたに相違ないが、彼等

は皆彼等の新統治者たる太子を信頼して、かれこれ不平がましいことを云はなかつたらしいのも、太子の新政の初めに於ける新羅遠征の壯舉が、彼等の英雄崇拜的心情の上に著しい影響を與へたからであるまいか。極端なる平和の新政が、思ひ切つた武斷の上に築かれることは、決して其實例に乏しくない。

一一、遣隋使

推古十五年の春二月、大禮小野妹子を特使として隋に派遣したことがある。表面の用向きは、妹子と同行した我國の沙門を彼地に於いて修業させるためといふことであつたが、實際の目的は、彼地の文物制度を視察して、大陸文化の輸入を速進せしめる準備を整へるためであつたらしい。隋書倭國傳の記載に據ると、其時妹子の携へた國書には『日出づる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙なきや云々』とあつた。此國書を披見して大いに氣色を損じた煬帝は、鴻臚卿に向つて『蠻夷の書禮無きものあらば、復以て聞する勿れ』と命じたさうである。傲慢な強大國の君主の飽くなき自負心が、彼の謂はゆる蠻夷の書によつて無殘に傷けられたといふことは、果して如何なる意味を持つてゐ

るであらうか。此國書の内容を以て、單に君主の威容を誇示するための抗禮として考へることは、太子の眞意を知るものでない。太子は人格の獨立的尊嚴を熱愛したやうに、國家の獨立的尊嚴をも熱愛した。必要な國際的禮讓の範圍を超えて自己を卑しうすることは、我國家を隷屬的な地位に置くといふ意味に於いて、太子の帝王の良心が許さなかつたに相違ない。例の漢委奴國王の金印や、魏書に麗々しく載せられてゐる女王卑彌呼の冊封文などが、古代の對支干係の上に投げる一種の暗影に就いては相應の辯解があるにしても、太子の此壯舉に對して、我々が無限の快を呼ぶことは、決して不當であるとは云へない。

翌年の四月、特使の重任を果して歸國した妹子は、さらに同年秋再び隋に使した。彼と同船したものには、副使吉士雄成や、彼が歸國の時行を共にして來朝した隋の答聘使裴世清の一行や、我國から彼地に送る

べき七八名の留學生などがゐた。其時妹子の携へた國書にも、同じく「東天皇敬んで西皇帝に曰す。云々」とあつた。此文意も、多分煬帝の驕慢なプライドに媚びるやうな虞れはなかつたであらう。彼は重ねて受取つた所謂蠻夷の書を單に野人の非禮としてのみ眺めたであらうか。先きに彼がわざ／＼鴻臚寺の掌客裴世清をして妹子と同道せしめた眞の動機は、わが國書に依つて不快を感じながらも、猶ほ文意の面に表はれてゐる意氣の高邁なのに感じて、其國風を視察せしめたのだといふ説がある。或はさうであつたかも知れない。

泰西文化の輸入が盛んに行はれた明治初年の時代に於いて、當時の權力階級とか識者とか云はれる人々が、外國に對して如何に不見識な眞似をして憚らなかつたかといふとは、何人と雖も記憶に新なるところであらう。明治世相史の最もサジェスチヴな一頁を占むべきも

のとして、現代の史家が假に鹿鳴館に於ける夜會の一節を叙するとし
たならば、彼は恐らく擧縮なしには其筆を進めることは出来まい。書
紀は隋使裴世清の迎接に就いてかなり委しい記録を残してゐるが、そ
れに據ると、彼等の一行が我國に到着した時の騒ぎは、中々大したもの
であつたらしい。江口の濱に繋がれた三十艘の飭船や、海石榴市の衢
を彩つた七十五匹の飭騎などは、假令我々をしてお伽話の王子を迎へ
るやうな可憐な光景を想像させたにしても、其處には當時の迎接を掌
つたものゝ見識の如何を疑はせるやうな事實は一つも見出せない。
これに比較すると、所謂鹿鳴館の一夜はどうであつたか。當時の顯官
等が外客に媚びるために一場の猿芝居を演じて、彼等の一笑を忝くす
るといふやうな悲惨なる滑稽事は、わが太子の治政の下には、斷じて許
されなかつたことであるのを注意しなければならぬ。

『日出づる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙なきや』——此
の國書の放膽にして洗鍊されたレトリックを見よ。偉大なる超人の
風格が躍々として眼前に浮動するのを覺えるのは、獨り私ばかりでは
あるまい。自己の偉大を把握した者に於いてのみ、偉大なる表現はあ
り得るのである。

二、冠位の制定

外征のことが、一先づ落着すると、初めて其の熟考の結果から出来上つた草案を實行すべき時期が来た。書紀の記載を斥けて、前に記した一僧侶の手記を信ずると、太子が其居を飛鳥の故都から平群の山の麓なる斑鳩の新宮に移した年は、恰も夫の有名なる冠位憲法の制定された年に當つてゐる。書紀の推古十二年の條に記された朝禮の改革も、或は同年の出来事であつたかも知れない。

私の判断にして誤らなかつたならば、所謂冠位の制定されたのは推古十三年の夏五月のことである。此冠位に就いては、書紀に『始めて冠位を行ふ。大徳、小徳、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智併せて十二階、並びに當色の繩を以て之を縫へり。頂は撮り摠べて囊

の如くし、縁を着けたり。唯元日は髻華を着く』とあるやうに、冠色に依つて貴族の階級を立てたものであるが、此新制が果して如何なる意義を持つてゐたかといふことを説明する爲には、當時の政情に就いて簡單な叙述を試みなければならぬ。

社會生活の體現としての政治組織が、實際上又は擬制上の血族團體に起原するといふことは、最近の政治學者が等しく認めるところである。此血族團體の原始的様式が主としてバトリアリカルシステムであるといふことも、亦多くの異論を見出さない。古代の我國にあつても、政權の中心が宮廷にあつたことは云ふまでもないが、所謂統治權の主體としての天皇の下には、氏族と稱する強大な血族團體が存在して、それらの族長が各部曲の民を率ゐて政治組織の基礎を爲してゐた。例へば、大伴とか、物部とか、蘇我とかいうやうな大族は、一面に於いては

官府の要職を世襲して人材登庸の道を閉塞すると、一面に於いては土地人民を私有して抜くべからざる權勢を築いてゐた。従つて、一度び眼醒めたる帝王があつて君權の伸張を計らうとすれば、勢ひ是等の氏族制度に對して大鐵槌を揮はなければならぬやうな有様になつてゐた。思ふに、太子の着眼するところも、茲にあつたに相違ない。與へられた史實に就いて考へると、新制の冠位は必ずしも血族の尊卑に據つて定められたものではない。中臣氏や物部氏のやうな有力の氏族の中にも、其或者は比較的下級の冠位に叙せられたものもあつたらしいし、境部氏のやうなさまで聞えない氏族の中にも、推古卅一年に新羅遠征軍の總督に任命された境部臣雄摩侶の如く至高の冠位に叙せられたものもある。察するに、此武將は、推古八年に萬餘の衆を率ゐて新羅の五城を抜いた大將軍境部臣と同人であつて、其赫々たる武

勳の結果が、斯くの如く破格な榮譽を齎したものであらう。推古十四年の夏五月に一介の工匠とも云ふべき靴作鳥が一躍して大仁の位に叙せられた事實の如きも、冠位の制定を單に今までに存在してゐた階級の公認に過ぎないと主張するものに對して提供された最も有力なプロテストであつて、此新制の裏面に潜む精神を明白に物語るものである。

冠位の制定に依つて太子が志すところは、疑ひもなく從來の閥族的勢力を拘束して、新に人材登庸の道を拓くことにあつた。朝禮の改革の如きも、書紀に『凡そ宮門を出入するには、兩手を以て地を押し、兩脚して跪き、閭を越えて立行せよ』とあることに依つて察すると、名を儀禮の肅靜に藉つて、權臣の疎慢を制したものと考へられぬことはない。太子は帝位に立てるロマンチシストの一人であつた。併し、あくなき

自己擴張の欲望に驅られて遮二無二にバベルの塔を築き上げようとする夢想家ではなかつた。太子の胸臆を支配した理想は、すべて現實に根差してゐた。現實の靜觀に基いて、理想の發展を計らうとするところに、太子の眞面目があつた。冠位の制定も、朝禮の改革も、此意味に於てのみ眺める時に、無限の味ひを生じて來る。太子を以て迂遠なる理想家と評するものがあれば、それは太子の時代を知らないものと云つて好い。

一三、憲法十七條(上)

冠位の制定から二箇月遅れて、推古十三年の秋七月に十七條の憲法が發布された。書紀が殊更に『皇太子親ら、肇めて憲法十七條を作る』と記したのは、此憲法の起草者が、特に太子自身であつたことを傳へんがためである。

憲法の文は、先秦の遺風を傳へた古朴な味ひのする漢文である。古文辭の通弊として難解は免れないが、意味のアンビギュアスな點はない。太子嫌ひな儒者の或者も、憲法の文を評して尙書の風があると云つた位であるから、文品に一種の高貴な特色の漲つてゐることは想像するに難くあるまい。従つて、太子の憲法にソモロンの箴言に於いて見るやうな詩的情緒の豊かさを求めて失望するものも、其文辭の有す

る固有の風格に就いては讚歎を禁じえないであらう。其處には帝王の意識に燃えたもの、侵しがたい威嚴と覺者の自信に充ちたもの、力強い道念との交響樂の中に、一脈の春風にも比すべき平和な調べがある。此平和な調べに依つて、我々が感じ得るものは、取りも直さず、太子の精神を一貫する『愛』の理想に外ならない。

私の見るところに従へば、第一に眞理に對する愛、第二に民衆に對する愛、第三に國家に對する愛は、太子の憲法を理解するために缺くべからざる三つの鍵である。例へば、第一條、第二條、第九條、第十條のやうに特に個人道德の根本に關して説いたものは、太子の眞理に對する愛を表現するものであり、第五條、第六條、第十二條、第十六條のやうに、特に撫民の精神に關して説いたものは、太子の民衆に對する愛を表現するものであり、第三條、第四條、第七條、第十四條、第十五條のやうに、特に治國の

大綱に關して説いたものは、太子の國家に對する愛を表現するものである。残りの第八條、第十一條、第十三條、第十七條の如きは、太子の行政に對する用意が如何に行届いてゐたかを見るためには極めて必要な條章であるが、此憲法全體の色彩の上から考へると、むしろ附屬的條款とも云ふべき感じがないでもない。

第一の部類に於いて注意すべきことは、太子の眞理に對する愛が佛陀の教説に集注されてゐることである。『篤く三寶を敬へ。三寶は佛法僧也。則ち四生の終期にして萬化の極宗なり』とまで傾倒してゐるところを見ると、第一條に於いて『和を以て貴しとなす』と教へ、第九條に於いて『信は是れ義の本なり』と教へ、第十條に於いて『忿を絶ち瞋を棄てよ』と教へてゐるものは、其用語が假令儒教の經典から出てゐたにしても、其精神は、多分佛陀の教説から汲み取つたものであらう。

或る偉大なる人間の思索の跡を追うて、其心の内部を覗き、其魂の姿を映し、其情念の坩堝の沸騰せる有様を窺ひ見ることは難かしいが、太子が斷乎として印度の神に奉仕することを決意するに至つた瞬間には、印度の神に奉仕することが、太子自身の善を加へるのみならず、全世界に善を加へることであつて、印度の神を棄てることは、太子自身の善を喪ふのみならず、太子の力に依つて作られ得べき善を全世界から奪ふことであるといふ確い信念に到達したに相違ない。

昔から儒者や國學者等が守屋に代つて代辯せんとする意氣は愛すべきであるが、抑印度の神を以て蠻神なりと譏刺したものと、印度の神に跪いて熱誠な祈りを捧げたものとの何れが、果してより深い精神生活の所有者であつたらうか。石塊や龍蛇の前に跪くものにはアフロヂテの前に額くものゝ心は分らない。生殖器を神聖視する未開人の

讚歎と、最高の存在として唯一神を認識したバレスチナの民衆の信仰とは互ひに相關しない。寧ろ、私は清新なる佛陀の福音が、政教の主權に對して嬌激な反抗を試みる豫言者の手に依つて傳へられず、反つて太子の如き政教の主權を一身に鍾めた王者の手に依つて傳へられたことを欣ぶものである。

一四、憲法十七條(下)

眞理に對する愛に於いて、佛陀の最も忠實な使徒の一人であつた太子も、彼の所謂『四生の終期にして萬化の極宗』なる道を、現實の國家に當倣めて生民を安んずるの具たらしめるためには、決して都合のいゝ、教説であるとは考へなかつた。太子の憲法の第二、第三の部類に屬する條章が極めて儒教的であるといふことを捉へて、偏狹なる儒者の中には、太子が民衆統治の準則として周公孔子の教理を盗んだと強辯するものもあるが、太子の博大なる精神から云ふと、素より思想に鎖國があるべき筈はない。彼は彼の心に依つて佛教の眞諦を味得したやうに、彼の頭に依つて儒教の本質を理解した。彼は、此二つのもの、長所を、それぞれ生かして用ひることが時代と民衆とを率ひるもの、當然

な責務であるとは考へても、佛教の祭壇に額いた頭を、再び儒教の聖殿に低げることが、一種の冒瀆であるとは考へなかつた。——古代のフランク王國のやうな教會國家の思想から見ると、太子は寧ろ異端の立場にあつたかも知れない。

未だ國家の原始的様式から脱し切らない當時の我國に、支那の政治組織を移して、これを我國特有の政體と同化せしめるためには、何よりも先きに、支那の政治學たる儒教の精神を受け納れることが必要であつたらう。未來を支配する道と、現實を統御する方便とを有機的に結び附けて、些かのギアツプをも示さなかつた點に、私は太子の比類なき調和的天分を認めざるを得ない。彼は建設者であつた。併し彼の建設はあらゆるものを破壊した過去の廢墟の上に新しい殿堂を築き上げたものではなかつた。彼は、過去を過去として重んじた。異國の神

に禮拜する時にも、祖國の祭壇を蹂躪しなかつた。異國の文化を輸入する時にも、祖國の傳統を斷滅しなかつた。印度の偶像は、我國の神祇と共に祀られ、支那の文字は、和訓と共に行はれた。况んや權力を以て『異國の神祀るべし、祖國の神祀るべからず』といふやうな嚴めしい禁令を發する信仰上の暴君ではなかつた。佛陀の忠實な使徒としての太子が、君主として支那の政治學を採用することの可否の如きは、初めから問題とはならなかつたに相違ない。

デリケートな注意を以て、太子の憲法の第二、第三の部類に屬する條章を觀察するものにとつては、どの點に太子の意圖があつたかといふことは自明の事實である。『有財の訟は石を水に投ずるが如く、乏者の訴へは水の石に投ずるに似たり』と云ひ、『國司、國造、百姓に斂する勿れ』と云ひ、『民を使ふに時を以てす』と云ふが如きは、太子の民衆に對

する愛が如何に深かつたかといふことを語る反面に、當時の氏族政治の害毒が如何なる程度にまで及んでゐたかといふことを語つてゐる。此氏族政治の害毒は、太子をして卒直に『官のために人を求む。人のために官を求めず』と云はしめ、更に明晰な言葉を以て、最後の重要な宣言を斷行せしめた原因であつたらしい。憲法第十二條が嚴として『國に二君靡く、民に兩主爲き』の意義を明示した時に、長い間土地人民を私有して限りなき横暴を擅いまゝにしてゐた當時の貴族等が、果して如何なる感慨を以て此條章に接したかといふことを考へると、其處には、最早蘇我氏もなければ、大伴氏もない。我々はたゞ凛として帝座の上立つた太子の雄偉なる風貌を仰視するのみである。

今日の法理觀念から見て、太子の憲法が果して成文法と云ひ得べきか否かは屢問題となるが、それはどうあらうと、太子の憲法の根本的價

値に動搖を及ぼすべき性質のものではない。何れにしても、我々の祖先が法典惠與者としての太子を見ることソロモンやモーゼの如くあつたといふことは、弘仁格式の序に、太子が親しく憲法十七箇條を作つて、國家の法制が此時から始まるといふ意味のことを述べてゐるのを見ても分るであらう。價値は内容を一貫する精神の上にあつて、形式の上にはない。

一五、實際的施設

歴史は、今日まで帝王と爲政者との無能を滿載してゐる。かやうな事例に對して、太子の業績が如何に眼ざましい對照を爲してゐるかといふことを知るためには、太子の制度と共に、太子の施政の實際的方面に着目しなければならぬ。

我々の祖先が、建國の初めから耕耘に依つて衣食の道を講じたことは、茲に更めて説明するまでもあるまい。歴代の帝王は、所謂農本主義に立脚して、常に農業を基調とする經濟生活の發展に努力した。併し、進歩は極めて遅々たるものであつたらしい。崇神、垂仁兩帝のやうな際立つた農業愛護者の治政の下にあつても、我々の祖先を支配した經濟生活が、さして豊富な背景を持つてゐたらうとは思はれぬ。太子の

時代に於いても、歴朝の拓殖事業や、支那朝鮮の移住民の誘致策などに依つてかなりの發達はしてゐたかも知れないが、全體から云ふと、まだ幼稚な状態にあつたらう。従つて、農耕を奨励して殖産興業の實を擧げるためには、何よりも先きに、交通や灌漑の利便を計ることが必要であつた。制度が如何に完備しても、制度の美裝に依つて飾られた國民生活の内容が貧弱であつては仕方がない。其治政の間に於いて、或は池を作り、或は運河を掘り、或は道路を通じて、眞の意味に於ける産業立國の基礎を築かうとした太子は、此點に於いても、慥に先覺者たるの名譽を享くべき人であつた。

書紀に據ると、太子が推古十五年の冬と、二十一年の冬との前後二回に亘つて作つた池塘の數は、高市池、藤原池以下九箇所である。國別にすると、河内に屬するものを二箇所だけ除くと、他は總て大和に屬する

ものゝやうであつた。大多數は新に作られたものであるが、河内の依網池の如きは、崇神帝の末年に造築されたといふ確證があるから、中には古くからあつたものを修繕するに止まつたものもあつたらしい。池塘の外にも、太子は栗隈の大溝を掘鑿した。此溝も、仁德帝の十二年に始めて掘鑿されたことが分つてゐるから、太子の時には、多分修繕を兼ねて擴張工事を施したものであらう。大溝といふものが果して如何なる性質のものであつたかは分り難い。或は舟航と灌漑との便を兼ねた運河のやうなものではなかつたらうか。和名抄には、栗隈を以て山城國久世郡に屬する一地名として擧げてゐるが、現今の長池驛附近にそれらしい形跡があるといふ穿鑿家もある。

栗隈の大溝が交通の利便のために掘鑿されたものであるかどうかは疑問としても、推古二十一年の冬に難波から飛鳥に至る大道が開通

したところを見ると、太子の頭腦に、交通の利便といふことが大いに問題になつてゐたことは疑ふべくもない。地質學者の説明するやうに、攝河地方に於ける今日の沖積層の平野の大部分は、古代に於ける難波江の港灣を形作つてゐたものであつて、當時の大和川は此の港灣の南端に注いでゐたのであるから、飛鳥の京と難波の津とを結び付けたものは、素より此一條の河川であつたに相違ない。新たに開かれた大道は、多分此河川に沿うて作られたものであらう。政教の中心であつた我々のアテネと、交通の要衝であつた我々のピレウスとは、太子の努力を待つて、漸く完全な連絡を得たのである。

國史の一隅に微な存在を認められてゐるに過ぎない如上の事實は、其實質的價值から云ふと、決して輕々に看過するべきものではない。池溝を作ることも、道路を拓くことも、先例のないわけではないが、太子

以前には、かやうに大仕掛の土木事業を起したらしい形跡がないから、假令費すところの時日と勞力とは多大なものがあつたにしても、それらの犠牲に依つて贏ち得た民衆の歡喜が如何ほどであつたかは想像するに餘りがある。すべてに對して徹底的な態度の所有者であつた太子は、國家の殷盛を將來して國民的文化の建設を計るためには、如何なる高價を拂つても頓着しないだけの自信と覺悟とがあつたらしい。そこには奪ふべからざる誠意があつた。此誠意の逆るところは何物をも燒盡せずんば己まなかつたであらう。太子の民衆が、偉大なる太子の仰ぐこと日月の如くであつたらうといふのは、決して誇張に失した讚辭ではない。

一六、太子の改革と大化の改新と

大化の改新として知られた近江朝廷の變革は、わが中古の王政に於ける一壯觀をなすものである。正しい見解から云ふと、あらゆる制度や組織や文物や憲章などが、或る統一した形式の下に活動すべき機運に達したのは此時であつて、眞の意味に於ける國家の結成は、天智鎌足の治政に於いて始めて完了したと云つて好い。歴史的發達のまゝに任せられた結果、重複や矛盾の巢窟となつた隋唐の複雑な制度を解釋して、秩序整然たる法治國の柱梁を組立てた技倆に至つては驚嘆すべきであるが、此偉大なる建設を驚嘆するものは、此偉大なる建設のために必要な地盤を豫備して、後に來るものに備へた先驅者の卓見と努力とに對して盲目であつてはならない。

大化の改新の内容が如何なるものであるかといふことに就いて幾分かの知識さへあれば、此著名な變革と、政治史の方面に於ける太子の業績とが、果して如何なる地位に立つべきであるかは、自ら了解されるであらう。燃ゆるが如き改革者の意氣に充ちた皇太子中大兄が、孝徳帝に奏して『天に雙日なく、國に二王なし。是の故に天下を兼并して萬民を使ふべきは、唯天皇のみ』と喝破し、自ら部民五百二十四口と屯倉十八箇所とを朝廷に奉還した瞬間を思ふと、私は此果斷なる皇太子の情熱を支配した力が、果して何處から來たかを考へないわけにはゆかない。カノバスの光は、イシユマエルの子等を荒野の間に導いたが、太子の光は、氣鋭なる年少改革者等を光榮の殿堂の中に引き入れた。太子の光に浴して不撓の力を得た中大兄の情熱も愛すべきであると同時に、此光の源泉たる太子の比類ない人格は、永劫の『忘却』の中に葬

られるべく餘りに尊い。

近江朝廷の變革を仕組んだ戯曲の第一幕が、巨利法興寺の茂れる槻樹の下に於いて起つた皇子中大兄と鎌足との興味ある挿話に始まることは周知の事實であるが、これらの雋敏なる青年等が、毎日黄卷を手にして周孔の教へを學んだ南淵先生を初め、彼等の後年に於いて、その完美なる改革を輔けた誠實なアツシスタントであつた高向玄理や、旻法師などは抑如何なる人であつたらうか。書紀に據ると、これらの人は、すべて推古十六年に妹子が再び隋に渡航した時同伴した留學生であつた。太子の意思に依つて漢土に派遣された彼等が、太子の薨後三十年にして當代の新知识たる職分を完全に果したといふことは、大いに意義あることではなければならぬ。約言すると、近江朝廷の變革は、唯にその粉本を太子の残した業績の内に求めたばかりではない。その

建設に参加して犬馬の勞に服すべき設計家や、技術者や、工匠なども、直接間接に太子の寄與したところであつて、天智鎌足の功業として特筆せらるべき近江朝廷の事業は、氏族制度の撤廢も、冠位の改革も、律令の編纂も、すべて太子の力に負ふところが多いのであるから、その功業に依つて齎された光榮も、獨り天智鎌足の私すべき性質のものではない。

政治史の方面に於ける太子の業績に就いてかなり悲觀的な見解を持つてゐる學者の説に従ふと、太子の新制に係る冠位や憲法は、形式的に支那の禮文主義を模倣したものであつて、單に政府の體面を整へるための虚飾に過ぎないといふのである。併し、これをしも猶ほ虚飾と云ふならば、榮譽の冠冕を以て人類の地位を高うした天才の事業は、一つとして虚飾でないものはないが、彼等は其處に果して如何なる辯明を試みようとするだらうか。人文の發達が如何なる徑路を取つて進

むものであるかを理解して、人文の發達を促すべき先驅者の事業を價値付けるべき正しい尺度さへ持つてゐたならば、今更太子の業績の意義に就いて彼れこれ云ふ餘地はあるまい。

一七、太子の性格

法隆寺の聖靈院は太子を記念する祠堂である。或時この祠堂を訪れた遠來の一外人があつた。彼はこゝで豊かに刺繡した衣を纏ひ、極めて質素な寶冠を戴いた太子の木像を見た。それは彼が今までに接した多くのものとは異つて、寶冠の下には、鋭く前方を見詰めた眼と、堅く鎖された口とがあつた。稍々吊り上つた眉は幾らかの神經過敏を現はし、頑丈に突き出た下顎は、強固な意思を示してゐた。彼は考へた。――

『この木像の製作者は、太子の容貌の上に、鋭い行政の能力と、高貴な王權とを現はしてゐるが、宗教上のやさしい影響はすこしも示してゐない。彼は、疑ひもなく佛教の興隆に就いてフアナチツクに傾倒したと

いふよりも寧ろより多く太子の法律に對して敬意を拂つてゐる。』
政治史の方面に現はれた太子の業績に就いて特に注意を拂ふもの
にとつては、太子の性格に對して、單に磨かれた叡智の奥に潜んでゐる
強烈な意思の力を印象し易い。併し、この印象を忠實に保存して、太子
の全部を理解するための索引たらしめようとすることは、果して可能
であらうか。ミルヴァンブリッチの戦捷者は、同時に、ニケア會議の
召集者であつた。如何に太子の法律を敬重するものも、太子の教會に
對して全然無智を装ふことは出来まい。太子のために設けられた帝
王の座が、正しく太子に依つて作られた教主の聖壇と隣してゐたこと
を否定し得ない以上、前者に依つて與へられた我々の印象は、當然ある
程度の是正を甘受せなければならぬ。此意味に於いて、偉大なる天才
の性格は、常に一種のラビリンスである。

推古二十一年の冬十二月、片岡山の附近を遊行した太子は、道に於い
て一人の飢者に逢つた。其時、彼は飲食物と共に自分の衣をも脱いで
飢者に與へた。悲憫の情は溢れて留まるところを知らなかつたらし
い。書紀は、太子の作として一聯の哀歌を残してゐる。

しなてる片岡山に、

飯飢ゑて、臥せる

その旅人、あはれ。

親無しに、

汝、なりけめや、

さす竹の君はや無き。

飯飢ゑて、臥せる

その旅人、あはれ。

太子の叡智と意思とのみを知るものにとつては、此哀歌の作者としての太子は、到底釋きがたい謎である。併し、四天王寺に療病、施藥、悲田、敬田の四院を建立して、我國最初の救濟事業を起したのも太子であることを知つたならば、何人でも、太子の叡智と意思との奥には、涙に濡れた温い心の潜んでゐたことを承認するに相違ない。あらゆる私情を抑へ、あらゆる障礙を乗り越えて、只管に或る高處を目差して突進する時には力強い半面が活躍するが、一度び皇帝の紫衣を脱して一個の「人」に歸つた時には、物の哀れを感じ易い、思ひやりの心の深い、何物をも赦し、何物をも受け納れる慈母のやうな他の半面が露出したであらう。萬有を棄て、地の感情を賤める聖者の心ではなくて、萬有を求め、地の感情を愛する達人の心である。

佛陀の忠實な使徒として太子の生涯に成しとげた業績を見ると、太

子は、神のものと、カイザルのものとの間に、何の差別をも置かなかつたらしい。慈悲の蔭には帝王の意識が眼醒め、愛の下には權力の意思が隠れてゐた。帝王の意識が愛を踏みにぢらなかつたやうに、權力の意思は慈悲を酷遇しなかつた。否、むしろ太子は愛を以て帝王の意識を育て、慈悲を以て權力の意思を培はうとした。そこには何の矛盾もなければ、何の撞着もない。すべての人間性を抱擁して完美ならしめる神秘的結合のみがあつた。此點から云ふと、太子は世界の帝王の歴史の中に、一つの特異な實例を與へたものではあるまいか。

一八、佛經典の講讚

佛徒の謂ゆる法主王乃至法主大王としての太子は、一代の教主として多くの事績を残してゐる。その主なるものは、第一に佛經典の講讚、第二に佛敎典の註疏、第三に佛寺の建立であるが、一般の布敎事業に就いては、正史や古記に何等の記載もないから、茲には其存否を付度すべき手がかりがない。

太子像として流布してゐる彫像や畫像の中に、昔から勝鬘講讚の御像と稱するものがある。普通に見受けるものは、頭に美しい瓔珞を垂れた寶冠を戴き、左手に塵尾を把り、緋の袍衣の上に袈裟を着けた姿が多い。畫像の場合には、その上に翠簾が褰げられ、前には八脚の經机の上に赤軸の經卷が開かれて、馬子や惠慈や、秦川勝など、思はれるやう

な僧俗の人物が度ましく太子の講説を傾聴してゐる。此種の畫像では、法隆寺に於ける文曆二年のものを最古として、他にも播州の斑鳩寺や、伊勢の西來寺などに二三の名作がある。著名な木彫の中で同じ種類のものとしては、前に記した橘寺と攝津の中山寺とにかなりなものがあるが、講讚に必要な總ての法具が完全に揃つてゐる點に於いて、中山寺のもの、方が遙に面白い。

太子の佛敎典の講讚と云へば、何人でも勝鬘經に限られてゐるやうに思つてゐる。併し、勝鬘經以外にも、太子は法華經を講讚したことがあつた。時日に就いては異説紛々たる有様であるが、矢張書紀の推古十四年といふのが正しいやうに思はれる。講讚の場所は、法華經が當時の岡本宮（今の法起寺）で講せられたことは分つてゐても、勝鬘經が何處で講せられたかは分らない。中には橘宮であらうといふ説もあ

るが推古十四年説に従ふと、その時は太子が既に橘宮を去つて斑鳩宮に移つてゐた時であるから、論理上此説は成り立ち悪い。さうすると勝鬘講讚の場所は太子の宮殿といふよりも、寧ろ推古帝の皇居といふ方が事實に近い想像であるかも知れない。書紀に據ると、當時の皇居は豊浦宮ではなくて、推古十一年に造營された小墾田の新宮である。

太子の講讚に先立つこと約百六十年前の梁の大通二年に同泰寺に於いて武帝が涅槃經を講讚したことがある。太子の講讚は僅に三日であつたが、武帝の時には一週間も續いたらしい。すべての點を比較して見ると、太子の講讚が梁武の先例を頭に置いて、意識的に之れを模倣したものであることは疑ひない。梁武の場合には、梁武の師たる光宅寺の僧法雲が下座にあつて陪聽したといふことが傳へられてゐるが、太子の場合にも、諸王や諸臣と、もに太子の師傅であつた惠慈法師

も多分其講説を聴聞したことであらう。太子の行迹は先人のそれと真似たことが明かである以上、この事績に對する獨創の名譽は遺憾ながら太子に歸すべきものではない。

信憑すべき記録のすべては、太子の勝鬘講讚が推古帝の意思を奉じてなされたものであることを記してゐる。之れに依つて察すると、此事實は太子自身の創始でないばかりでなく、太子自身の發意でなかつたことも明かである。推古十五年と云へば、太子がすでに三十三歳に達してゐた時であるから、その頃には最早太子の佛教に對する研究も行き届いてゐたことであらうし、教主としての太子に對する臣僚の歸依も一通りでないものがあつたらう。従つて獅子座の上に登つた太子が巧妙なる比喻と、明晰なる判斷とを以て佛陀の深奥なる教説を講じた時には、此講筵に列したすべての大衆は、涙を垂れんばかりの感激

を以て、此未曾有の盛儀を迎へたに相違ない。『諸王、公主及び臣連、公臣信受して嘉せざるなし』といふ一僧侶の手記にして信じ得られるならば、勝鬘經の講讀に續いて行はれた法華經の講讀は、勿論諸民の止みがたい熱望に依つて企てられたものであらうと考へる。

一九、三經疏の制作

政治史の方面に於いて比較的、空虚な感じがある太子の後半生は、主に書齋の生活であつたらしい。所謂上宮疏として名高い法華、勝鬘維摩の三註釋は、實に推古十七年から二十三年に至る前後七年間の事業であつた。單に口を以て説くばかりでなく、進んで筆を以て説かうとしたところに、眞理を愛する太子の態度の如何に徹底してゐたか、現れてゐる。

太子の三經疏は、邦人の手になつた著述の中で現存してゐる最古のものである。達意な漢文を以て經典の趣意を釋明してあるが、無用の談理に亘らず、要領のみを擷んで記述の簡潔を保つた手際は、なかく鮮かなものだ、と云つて好い。一例を挙げると、勝鬘經の義疏に勝鬘獅

子吼の義を解して、『勝鬘は當體に就いて名をえたり獅子は譬を擧げて稱となす』とある。すべてが此調子で、聊かも苦澁や狐疑の迹がない。編纂には惠慈や惠聰の徒も何等かの關係はあつたらうが、それは單に助手といふ程度のものであつて、親しく下筆した人が、太子自身であつたことは疑ひえないと思ふ。

講讀や註疏の場合に、太子が何故勝鬘經を選んだであらうかといふことの理由に就いては、此の經典の説述者が婦人であつたといふこと、及び其十大受三大願なるものは、特に婦人に對して精神上的の戒律を與へたものであるといふことの二つを擧げる人もあるが、多分其邊のところであらう。法華經の方は、其資生產業皆是佛道の思想からして、國家的觀念と佛陀の教説とを結び付けようとする考へから選ばれたものに相違ない。維摩經に至つては大いに解釋に苦しむが、或は太子の

佛教に對する立場が、在家の一居士として維摩のそれに似通つてゐたからではあるまいか。太子の義疏の冒頭に、維摩を評して『志は益物に存し、形は世俗の居士に同じ』と特筆してある點を見ると、殊にさうした感じが深い。

三經疏の製作が、斑鳩宮に於ける事業であつたことは、云ふまでもない。傳説に據ると、註疏の製作の際に、太子は屢宮内の小堂に於いて三昧に入られたが、その時夢寢の間に金人が現れて、不通の義を傳へたといふことである。これが漢明の求法に纏はる名高い傳説の焼直してあることは勿論であるが、斑鳩宮の内部に一小堂があつて、そこに太子が屢參籠せられたといふことだけは事實であらう。今でも斑鳩宮の古址として知られた法隆寺の東院に夢殿と名付ける八角堂があつて、太子の作と云ひ傳へる如意輪觀音の像を安置してゐる。此堂は、聖武

帝の時に大僧都行信の願に依つて阿倍内親王が藤原房前に再建させたものであるが、それまでの荒廢の様は見るも慘ましい状態であつたらしい。行信は『上宮院毀ちて餘基なし、輦路荒れて岳墳をなす』とさへ云つてゐる。皇極二年に於ける上宮王族の滅亡から後は、太子の時代に四民の瞻望を集めた斑鳩宮も、全く顧みる人もない廢墟となつてゐたものであらう。太子の生きた感化の力を示して遺憾のない壯烈な殉教史の背後には、詩人の涙を唆る麥秀の嘆があつた。

斑鳩宮に於ける晩年の太子が、假令如何なる日を送つてゐたにしても、其生活は豊かな思索と體驗とに依つて深められた静けさに充ちたものであつたらう。叡智の深奥を意味するダントの沈黙は、その穩かな容貌の上に一抔の暗影を點じたかも知れないが、その一抹の暗影に依つて購ひえられた勞作の價値は、果して幾干であつたか分らない。

斑鳩宮の春の夜が闇けて、平群の山に傾く月光が微かに小堂の影を映し出した時、その小堂の扉を開いて音もなく渡廊の上を歩んでゆくのは何人であつたらうか。千年の後に貽るべき金玉の文字は、決して几上に於いてのみ書かれたものではない。

二〇、佛寺の建立(上)

我國に於ける佛寺の起源は、個人の私邸に於ける祭壇から始まるものである。欽明帝の頃から頻々として我國に舶載された佛像は、當初民間の歸依者等に依つて竊に祀られたものであるから、未だ整然たる規模を持つた伽藍といふやうなものがあらうはずはない。欽明帝の以前にも、繼體帝の十六年に梁の司馬達等が佛像を負うて我國に渡來し、その佛像を坂田原の草堂に安置したとかいふことが傳へられてゐるが、我國に於る佛寺の濫觴と云はれる蘇我稻目の向原寺（欽明十三年）にしても、もと／＼自分の住宅を淨捨して寺院としたものであるから、その實質は、達等の草堂と多く選ばないものであつたらう。其後にも、馬子の石川の宅に於ける佛殿（敏達十三年）であるとか、難波の大

別王寺であるとか、大野丘の北の塔（敏達十四年）であるとか云つて、二三の寺は建てられたが、何れも個人の經營に係るものであつて、いはゆる七堂伽藍の美を具へた堂々たる大寺であつたらしい形跡はない。従つて、所在に宏壯な佛寺が建立され、堂塔相望み、梵唄の聲相應するといふやうな盛觀を實現したのは、先づ太子の時代に始まると云つて好い。飛鳥の眞神原に衣縫の祖樹葉の家を毀つて巨利法興寺の礎石を置いた崇峻帝の元年は、正に太子が十五歳の時であつた。

近畿地方を旅行すると、到るところに太子の建立と自稱する寺院がある。大和から河内にかけては最も多いが、播州や江州のやうなかなり中央から遠ざかつた地方にもすくなくない。時には寺號に冠した太子の名がエポニムとして残つてゐる土地もある位であるから、其中の或物はかなり古い時代から太子の建立と信せられてゐたに相違

ない。併し、これらの寺院を以て皆太子の建立であると信じたならば太子は五十年の生涯を擧げて佛寺の建立に専心しても猶ほ不足を覺えるわけであつて、其信すべからざるは多辯を用ひるまでもない。

太子の建立に係る寺院の数が果して幾千あつたかは分らないが、太子に關係ある色々の舊記は、すくなくとも七つ、多いものに至つては四十有餘の寺名を擧げてゐる。此點に於いても、比較的信憑すべき一僧侶の手記に據ると、此古代の記録家は、太子建立の寺院として、四天王寺、法隆寺、中宮寺、橘寺、蜂丘寺、池後寺、葛城寺の七つを數へてゐるが、私は、以上の七個寺の中から葛城寺を除いた代りに、元興寺と熊凝寺とを加へたものが、大體に於いて眞に近い數ではあるまいかと思ふ。——何故に葛城寺を除くか、何故に元興寺と熊凝寺とを加へるかといふことに就いては、かなり悉しい説明を要するが、茲には一切を省略するより外は

ない。

此時代の寺院が果して如何なる形式のものであつたかといふことは、此時代の寺院であつて、舊制を維持したまふ今日に残つてゐる四天王寺や法隆寺を見ると、先づ大體の様子を想像することは出来よう。未だ山岳佛教の起らない時代であるから、寺院の所在地は多く平原であるが、そのプランの整然たる有様は、一種の城郭といふやうな感じがあつて、後世のそれに於いて見るやうな亂雑な印象を與へるものとは違つてゐる。特に注意深い観察者等は、微妙な均勢を示した堂塔の布置や、巧な効果を現した門塔の結構などにも、一々此時代を支配した氣分を感知することが出来て、如何なる場合にも、深甚なる感興を與へられないことはない。

殊に留意すべき點は、此時代の寺院がアゼニームの役目を努めて

ゐたことである。宗教上の祠廟が同時に、學術や文藝や雄辯などの研究所として役立つた實例は多いが、わが古代の寺院も其例に漏れなかつたらしい。いはゆる學問寺の稱は、暗に此事實を肯定するもので、飛鳥朝から奈良朝にかけての文化は、すべて茲に起り、すべて茲に發したものであつた。

二二、佛寺の建立(中)

太子の建立に係る寺院に就いて、其現在の状態を略説して置かう。破壊と荒廢とが君臨する過去の世界に對して一顧を與へることは、古代の奥底に輝く幽光に心を奪はれ易い我々にとつて、必ずしも無意味なことではあるまい。

私は嘗て法興寺の故地と信じられる安居院の附近をさまようたことがある。時は早春であつた。丘陵の窪地や、田圃の間には、まだ消えやらぬ雪が残つてゐた。嘗ては一山の堂塔が雪を被つて水晶宮の美觀を現出したこともあらうと思はれる巨刹の址が、今は見る影もない耕地となつて、農夫の鋤犁に耜き返されてゐる様を見た時、私は限りない追想の裡に湧いて來る滅落の悲しみを感ぜないわけにゆかなかつ

た。併し、此滅落の悲しみを感ずるのは、獨り法興寺の故址を訪れた時ばかりではない。形ばかりの堂宇が、微に昔の俤を留めた境内に、三層の塔婆の物悲しげに立つてゐる法起寺にしても、奈良の舊都の南郊に由緒ある寺名と、一字の小堂と、若干の佛像とのみを残してゐる大安寺にしても、それが飛鳥時代に榮えた池後寺や熊凝精舎の後であることを考へたならば、何人でも意外な桑滄の變に驚くであらう。橘寺や中宮寺も残つてはゐるが、そこにも亦古代の華かな夢を思ひ起させるやうなものは何物もない。これらの寺院に比較すると、大阪の四天王寺や、蜂丘寺の後身たる京都の廣隆寺が幾分の舊觀を留めて、今猶ほ民衆の崇信を鍾めてゐるのは、兎に角珍らしいことゝ云はなければならぬ。

巡禮者の都市ともいふべき京都の數知れぬ寺院の中にあつて、廣隆寺の脊負うてゐる歴史ほど古いものはない。嵐山行きの電車に乗つ

て太秦の停留所に下車すると、此古刹の巨大な山門は、南に面して聳えてゐる。建造物のすべては平安朝以後のものであるが、所藏の佛像の中には、飛鳥時代から平安時代にかけての名作が多い。太子を祀つてある上宮王院の西側を左に折れて約半町ばかり行くと、疎らな樹立の中に桂宮院と名付ける頽廢した小堂がある。傳説に據ると、此廣隆寺の夢殿ともいふべき八角堂の所在地は、太子の所謂楓野離宮の故址であるといはれてゐるが、眞疑のほどは別として、太子の生前に、太子が屢此あたりを逍遙したこともあらうといふやうな想像は、必ずしも成立たないものではない。

静寂な廣隆寺の境内を去つて、熱鬧な四天王寺の境内に來ると、私は沈黙の太子に別れて、活動の太子に會するやうな心持がする。此熱鬧な古刹が、所謂浪華名物の冠として物質の都を彩るべき唯一の民衆的

靈場となつたのは、果して何時頃から始まるものであらうか。兵燹や雷火に罹つて屢炎上した結果、創建時代を記念すべき古建築や古美術などが地を拂つて空しいのは遺憾に堪へないが、煤煙と塵埃とによつて頭上を密閉された大都會は、此著名な古刹があるために、どれだけ素戔な印象から救はれてゐるか分らない。すべてのものが現在と未來とを物語るに忙しい間にあつて、我々を悠遠な過去の時代に振り返させる何物か、あつたならば、その一つが荒陵山四天王寺であることは云ふまでもない。

上に述べたやうに、太子によつて創建せられた寺院のすべては往時の盛觀を喪うてゐるが、兇暴なる時の威力も、さすがに吾が法隆寺には及ばなかつたらしい。假令昔日のすがたをありのままには傳へてゐないにしても、此古刹のみは、建築物も、佛像も、寶器も、形觀も、皆飛鳥時代

の俛を残して我々の眼前に、十三世紀の前に榮えた古代文化の壯麗な有様を髣髴させてゐる。——クロイソスの富を以てしても購ふことを得ない此遺物は、我々が我々の祖先より受け嗣いで、また我々の子孫に譲るべき無價の寶である。

當然の順序として、私は法隆寺に就いて一言しなければならぬ。

二二、佛寺の建立(下)

法隆寺の草創に就いては、發願の年が用明帝の元年であつて、落成の年が推古帝の十五年であることは分つてゐるが、起工の年が果して何時頃であつたかは分らない。書紀が明記する法興寺の起工と落成との間には約八年の日子が経過してゐるから、此事實に基いて推斷すると、法隆寺の起工は推古帝の七八年頃ではあるまいか。學者の間には色々の説があるやうであるが、別に確たる據りどころがあるわけではない。

法隆寺の所在地は、古の斑鳩の里の地である。山野の間に斑鳩が群居してゐたために、此地名をえたといふ傳説があるが、或は事實であつたかも知れない。北には茶褐色の地膚に赤松の緑が美しく調和した

平群の山を負ひ、前面一帯には、杜と杜とが相接し、叢林と叢林とが相連り、農園と農園とが相續く、緑の波の間から、無數の村落や寺院などが頭を覗けてゐる。奈良の市街からは南西に當つて約八哩ばかりの距離にあるが、空の快よく霽れ渡つた日には、汽車が郡山の驛を離れると、間もなく右手の方に此古刹の塔影をかすかに望見することが出来る。

今日残つてゐる法隆寺の大伽藍を見ると、人工の美が自然に依つて如何に醇化せられるか、自然の美が人工に依つて如何に高調せられるかといふことに對して、此上もない教訓を垂れてゐる。此一廓を組立てた建造物のグループが、その典雅な、平靜な、明快な、氣品の高い、或る統一した藝術的氣分に支配されてゐることを見逃さないものは、同時に、此建造物のグループと切離して考へることの出来ない背景の驚くべき効果を看却するやうなものはあるまい。平群の山は必ずしも超凡の

美を持つてはゐないかも知れないが、その圓味を帯びた輪廓や、なだらかな傾斜や、温かな感じのする地膚や、矮松の細々とした姿態などは、此建造物のグループを待つて微妙な諧調を形作つてゐる。此意味に於いて、此大伽藍を出来るだけ淨化された美の典型たらしめようとした最初の設計者である太子の意志は、今猶ほ生々として我々の胸に響いて來るのである。

法隆寺の主要な建造物が、謂ゆる西院に屬する金堂と、中門と、塔婆と講堂とから成立つてゐることは、茲に更めて説明するまでもあるまい。最後の棟は正暦年間に京都の法性寺から移建したものであるが、他の三棟は創建時代の姿をありのままに傳へる貴重な遺物として、世界に現存する最古の木造建築物たるの名譽を擔うてゐる。正面の中門を通じて歩を廓内に移すと、向つて左には天に冲する炎を思はせるや

うな五層の塔婆が聳え、右には美しい壁畫と、アーケイックな金屬佛の一群とを藏する金堂がある。此兩者から稍々距離を隔て、講堂が建つてゐるが、それぞれの建造物は、各自に其個々の特色を没却して、或る一つの纏まつた調和の中に融け込んでゐる。永久に此世を去つた過去の時代の尊敬すべき存在を心靜かに欽慕しようとするものは、廓内の或る地點を選んで、此纏まつた調和の中に身を置くが好い。十三世紀は遽然として我々の身に迫つて來るが、其處に表現せられた偉大なる美の形式は、恰も現代の卑少と貧弱とを冷笑するかのやうに見える。二萬三千坪の地域に、三十餘棟の保護建造物と、二百七十餘點の國寶とを藏してゐる法隆寺の大伽藍は、我々の國民的文化の發祥を物語る唯一の記念碑である。茲に來つて此碑面に鏤刻されてゐる文字を讀むものは、彼が如何に人類の進化や向上に對して無關心であり、且つ天

才の卓越した人格や業績に對して何等の興味をも感じないものであつても、彼は必ずや或る非凡なる靈感を興へられなければ止むまい。人間を内部から改造する力は常に此種の靈感に依つて孕くまれるのである。

一三三、學術文藝の勃興（上）

太子の文化輸入政策は、自然學問や藝術の勃興を促したに相違ない。正史の記載するところは極めて不完全であるが、猶ほ其邊の消息の幾らかを漏らした有力な記事がないでもない。

書紀は推古十年に百濟の僧勸勒の來朝したことを傳へてゐる。此多才なる僧侶は、渡海の時、天文、地理、曆術、遁甲、方術に關する數多の書籍を將來した。これらの書籍が如何なる題名を持つたものであつたかは分らないが、強ひて臆斷を加へると、十世紀の頃にわが特志なるピブリオグラフィアが書き留めてゐる當時の現在書目の中で、山海經、博物志、陰符經、淮南子及び漢書の律曆志や地理志の類は、他の多くの典籍とともに、此の時始めて我國に傳來したものであるまいか。何れにし

ても、新知識に渴してゐた當時の貴紳等は、争うてこれ等の書を傳寫し、これらの書に就いて百科の學を修めたい。現に、書紀は、太子の命に依り、陽胡史の祖玉陳、村主高聰、山背臣日立等の學生が、此新來の學者に就いて、曆法や、天文や、方術などを學んだことを傳へてゐるが、推古十二年(?)に於ける宋の元嘉曆の採用は、慥に此事實と連絡を有するものと考へられる。殊に、推古十八年に高麗から僧曇徴が歸化した後は、此五經に曉通した學者に就いて學んだ當時の有爲な青年子弟も多かつたに相違ない。推古二十八年には、太子は馬子と計つて國史の編纂を試みられたが、その時はこれらの有爲な青年子弟等は缺くべからざる助手として、史料の採集や、文書の整理などに任じたこともあつたらう。駁々たる文化の發達は、一として太子の努力を待たなかつたものはない。

曆法の採用は、當時の人心の上に、多分微妙な影響を與へたこと、思ふ。時候の寒暖や草木の榮枯などのやうな自然の現象に依つて纔に日月の推移を直感してゐたに過ぎない上古の簡樸な民衆等が、始めて科學的正確を持つた曆法に依つて正しい時間の觀念を得た時には、彼等の眼前に、卒然として世界が新しい意味を帯びて輝き渡つたかも知れない。曆法の採用以前にも崇峻四年以後は、既に佛教徒の間に法興と稱する私年號が行はれてゐたが、法隆寺の金堂の本尊である釋迦佛の光背銘や、鎌倉時代の書紀註釋書に出てゐる伊豫湯岡の碑文などに據つて察すると、太子は一方に曆法を採用すると、もに一方には此私年號を半官的に公認したらしい形跡がある。——湯岡の碑といふのは、推古四年に、太子が僧惠聰と馬子とを同伴して伊豫の道後温泉に遊んだ時、その神井の効驗を讚した一碑を建てたものを云ふのである。

推古二十八年に於ける國史の編纂も、太子の晩年に於ける書齋事業の一つであつたらしい。書紀には『天皇紀及國紀、臣連、伴造、國造、百八事紀の國造本紀などに照して考へて見ても、其の内容がかなり浩瀚なものであつたことは想像される。然るに、此貴重なる史籍は、皇極四年に於ける蘇我氏の滅亡に際して多くの珍什寶器とともに焼き棄てられたが、若し、此呪ふべき燔書の厄さへなかつたならば、我々の古代史は、どれだけ今日の幽暗から免れてゐたか分らない。前記の國造本紀などは、史官船惠尺の努力によつて救ひ出されたもの、一つであらうが、その焼失した大部分が、如何に貴重べき記録に充ちてゐたかといふことを考へると、私は太子の偉大なる努力が水泡に歸したことを傷むと同時に、我々が當然に所有すべき筈であつた最も價値ある古典の徒ら

に亡失したことをも悲しまないわけにゆかない。古人が多大な勞苦を顧みず、僞作の陋を敢てするに至つた多くの理由の裡には、此書の亡失を愛惜する至純な感情も含まれてゐたのではあるまいか。

二四、學術文藝の勃興(下)

學術の勃興に寄與することの多かつた太子の文化輸入政策は、他方に於いては、更に工藝美術の發達を促した。太子の執政以前にも、崇峻元年には、法興寺の建立に参加するために朝鮮から澤山の寺工や、鑪盤師や、瓦工や、畫家などが渡來したが、堂塔伽藍の建立が、愈盛んになつた太子の時代に於いては、尙ほ多數の工匠や技術者等が要求されたのであらう。書紀に據ると、推古十二年には、黃書畫師や山背書師などが定められたが、是等の繪所に任せられたものは、かの因斯羅我の子孫や、白加や、東漢末賢や、高麗の加西溢など、いふ書家ではなかつたらうか。殊に、推古十八年に渡來した曇徴は、彩色紙墨の術に達してゐたといふことであるから、彼の渡來後は、我國の繪畫も一層進歩したことゝ考へ

られる。寺院の莊嚴を整へるためには、畫工以外にも各種の美術家が必要であつた。正史の記載に據るところはないが、此時代には、彫刻家や建築師等も踵を接して難波の津に上陸したに相違ない。

人類の卓れた藝術的表現は、常に宗教上の靈感に伴ふことが多い。然るに、我々の祖先に共通する本來の精神生活は、極めて幼稚なアニミズムに過ぎなかつた。神道の名によつて知られた此宗教には、たゞ單純な祠堂があるばかりで、其祭壇には何等の偶像も祀られてゐなかつたから、我々の祖先が夫の神秘と壯麗とを愛する異教の影響を蒙るまでは、我々の美術は、宗教に依つて何等の靈感をも受けることがなかつた。原始的な造形美術とも云ふべき石像埴輪の類や、幼稚な裝飾畫としての石郭紋様や、明器として知られた副葬品の或物などに依つて代表される我々の原始時代の美術に對しても、佛教の傳來は、非常に重要な時

期を劃したものと云つて好い。

今日の遺品に據つて察すると、所謂飛鳥時代の美術の絶頂を意味するものは、建築と彫刻とであつたらしい。法隆寺に残存する三四の建造物を初めとして、法起寺や法輪寺の三層の塔婆などを見ると、其細部の技巧は兎に角として、此時代の建築家は、美の本質を直覺する敏感と、美の形式を完成する非凡な手腕とを持つてゐた。法隆寺の塔婆や金堂に於いて表現せられたやうな美の最高調を、我々は法隆寺以外の何處に於いて求めることが出来るか。彫刻に於いても、時代の前後に依つてかなり著るしい相違はあるが、所謂夢殿の觀音を初め、中宮寺や廣隆寺の彌勒のやうな作品になると、其陰影に乏しい、比較的單純な線や形に依つて作られた表出の裡に、あらゆる感覺の世界から超絶した典雅な、嚴肅な、靜かな、冥想的な美の境地がある。思ふに、此時代の造形美

術は、人間の肉に執着して、其形體感から美の或る規範を抽象しようといふよりも、寧ろ人間の精神生活を支配する或る崇高な感動を具體的に再現せんがために、便利上人間の肉體を材料として取扱つたといふ感じの方が強い。従つて、天平時代の爛熟期に於いて見るやうな人間の肉體に對する深い研究や、精緻な觀察によつて得た形體感から滲み出る官能上の美には缺けてゐるかも知れないが、其朴素な表現の中には、人間の心を捉へて離さない強い魅力が籠つてゐる。此點は、此時代の繪畫に於いても同じことであつたらうと思ふが、私の所信を確めるべき資料の残つてゐるものが甚だ乏しいのは遺憾である。

推古二十年には、吳に學んで伎樂の舞に長じた百濟人味摩之が來朝した。書紀に據ると、彼は櫻井に定住して、眞野首弟子を初め、二三の少年に伎樂を教授したと云はれてゐるから、其後は音樂舞踊などの方面

に於いても長足の進歩を遂げたことであらう。後代に於ける雅樂の盛大な發達に留意するものは、此事實に含まれてゐる重要な意義に就いても決して無關心であることは出來まい。

二五、移植文化の内容

わが飛鳥朝の時代には、支那大陸と西方諸國との交通が極めて頻繁であつたことは、既に説明して置いた。當時に於いては、古い傳統と歴史とを有する漢人固有の文化は、夙くも爛熟期に這入つてゐたが、此漢人固有の文化は、西方諸國との頻繁な交通に依つて、さらに種々の外來文化の洗禮を受けてゐた。印度の佛像や、ペルシャの織物や、東羅馬の什器などが、此時代の支那文化の上に及ぼした影響は、蓋し想像に餘るものがあつたらう。此西方文化の流れは、自然の順序として朝鮮に入り、朝鮮を經由して我國に流入した。従つて、わが飛鳥朝時代の輸入文化の内容には、上は漢時代から下は南北朝時代に至るまでの漢人固有の文化が主要な成分として存在してゐるばかりでなく、その中には、支

那以西の諸民族——例へば、印度や、ペルシアや、東羅馬などの起原と形式とを異にした種々の文化的要素が混交してゐたことを看過してはならない。

法隆寺の金堂に藏する玉蟲厨子に施された鍔金具や密陀繪などの裝飾模様が、遠く希臘や羅馬に遡源するといふ一つの事實さへ、如何に我々の興味を刺戟するに足るか。希臘のホニーサツクルと、北魏の建築と、印度の佛像と、高麗時代の壁畫と、所謂ニクタシスとの奇妙なる結合を解決しようとする警眼なる観察者等は、此時代が我々の前に遺した唯だ一個の記念物を凝視する瞬間に於いても、猶ほ十三世紀の過去に於ける東西文化の融合を實證する生きた秘密を見落すやうなことはあるまい。建築や彫刻は云ふまでもない。中宮寺の天壽國曼陀羅を初めとして、法隆寺の金銅幡や天蓋なども、此意味に於いて観察する

時、我々に對して無限の意義を囁くのである。

推古時代の偉大なる文化の建設が、思ひ切つた大陸文化の輸入に依つて完成せられたことは疑ふ餘地がない。太子の終始一貫した政策は、すべて模倣に立脚したものであつたと斷言しても差支へはあるまい。太子にあらずとも、あゝいふ條件とシチュエーションとの下に、あれだけの大事業を成就するためには、如何なる天才も、必ずや太子の選んだ道を執るより外はなかつたであらう。當時に於ける我々は、單獨に我々の生活を我々の裡より發展せしめたところに誇るべき文化の建設を夢想し得るやうな都合のいゝ状態の下にはなかつた。愚かなる自己を死守して優秀なるものゝ前に跪くことを肯じなかつたならば、我々の祖先は、更に長い間無限の闇を辿るべき未開人として残つたに相違ない。公平なる歴史の批判は、太子の執つた政策が、其時代に對

して最も聰明な方法であつたことを物語るのである。

併し、如何なる論者も、太子の大陸文化の移植が没批判的に行はれたとは云ひえまい。民衆等が、没批判的に賞讃し、崇拜し、眩惑した時に於いても、太子のみは獨り醒めた態度を以て、新來文化の價値を評價しえた一人であつたことを信すべき理由がある。權威ある建築史家も、此時代の建築が、單に支那や朝鮮の直寫でないことを主張してゐる。現に、太子の新制に係る冠位は、當時の百濟や新羅の制度を移植したものであることは明白であるが、最近の研究に據ると、從來音讀されつゝあつた大徳以下の冠名は、正しく國語にて訓讀されてゐたといふ動かしがたい事實が擧つてゐる。此事實に依つて見ても、太子の文化輸入には、常に調和と撰擇とがあつたことを想像し得べく、盲目的な外國崇拜のみが太子の眞骨頂であると誤解してゐるものにとつては、太子の眞

意を理解せしむべき絶好の機縁を與へるものと云つて好い。

探險家が意外な處に氷河の搔痕を見出して驚くやうに、大陸の飽満した文化が、太子時代の文化の上に消し難い痕跡を残してゐるのを見出すことは、我々にとつては大なる驚異である。此文化の流れが、恰もノアの洪水のやうな勢ひを以て、當時の我國を救ふべからざる汎濫の中に陥れた時に、此開門の鎖鑰を握つて調節の役目を演じた太子の事業を思ふ毎に、私は常に偉大なる先驅者の勞苦に充ちた生涯を思はないことはない。

二六、太子の周圍

傳説に據ると、推古十三年に斑鳩宮に遷つてから後の太子は、調子麻呂の御する愛馬鳥駒に乗つて、毎日飛鳥の小墾田宮に參内して、親しく政務を掌つたと云はれてゐる。斑鳩の地から古の廣瀬、式下、十市の三郡の平原を横斷して、真直ぐに高市郡の飛鳥に通ずる道程は五里未満の近距離であるから、駿足の力を籍つて、毎日此間を往還するといふこともさしたる難事ではない。併し、當時の飛鳥朝廷には、馬子を初め多くの大官がゐたことであるし、國家の政務と云つてもかなり單純なものであつたに相違ないから、太子が日々斑鳩宮から小墾田宮に參内せられなければならぬほどの必要もなかつたであらう。此點から考へると、太子の日常生活は、半ばは斑鳩宮に於ける私的生活であり、半ば

は小墾田宮に於ける公的生活であつたと見るのが最も事實に近いかも知れない。

推古四年に眞神原の法興寺が落成した時、始めて此巨刹を董したものは、惠慈と惠聰との二人であつた。推古十年の冬十月に來朝した朝鮮僧觀勒、僧隆、雲聰等の如きも、初めは必ずや飛鳥附近の僧堂に住んで、皆禮拜供養のことに専心したものであらう。私の見るところでは、これらの僧侶の大部分は、後に法隆寺に轉住して、太子の後年に於ける文化的事業に參畫するところがあつたのではあるまいか。勿論、太子の許には、博士覺智や船首王後を始めとして、澤山の秀才はゐたであらうが、佛經典の註釋や、國史の編纂や、佛寺の建立などのためには、さらに多くの僧英に待つところがあつたに相違ない。従つて、太子が斑鳩宮に遷つてから後も、政治の中心は依然として飛鳥にあつたが、政治以外の

文教に于する事実上の策源地は斑鳩宮であつたらしい。太子と鳥佛師との關係を思ふと、此高名なる藝術家も、後には飛鳥の坂田寺を去つて、法隆寺の附近に住んでゐたであらうとさへ考へられぬことはない。確實なる記録に徴すると、太子には膳部善岐々美郎女、蘇我負古郎女、尾治位奈部橘郎女の三妃があつた。膳郎女には、春米女王を頭として八人の王子女があり、負古郎女には、山背大兄王を頭として四人の王子女があり、橘郎女には、白髮部王の外に今一人の王女があつたから、太子は都合王子八人、王子六人といふ子福者であつた。しかもこれらの王子女には、又幾人かの王子女があつたことを信すべき理由があるから、晩年の太子を圍繞する家庭的空氣は、極めて賑かなものであつた。殊に、老齡の母后間人大后が斑鳩宮の一部(?)である中宮寺に於いて、其餘生を送つてゐられたとすれば、斑鳩の地を中心としたいはゆる上宮

一族の繁榮は、當時の強族を壓倒するの觀があつたらう。太子の薨後廿年を出でずして起つた怖るべき悲劇の素因が、此時に於いて既に醗釀されつゝ、あらうとは、太子の聰明を以てしても、恐らくは豫覺するところが出来なかつたに相違ない。

自己の周圍には、優秀なる學者、僧侶、藝術家等の一群を集め、自己の前には、強大なる一門の繁榮を目睹した太子の晩年の生活は、決して不幸といふ言葉を以て形容せらるべきものではない。當時にあつては、傲腹なる權臣馬子も、太子の前には、唯だ從順なる一個の良太夫に過ぎなかつたし、太子の事業を咒咀する反對黨の餘類も、全く影を潜めてゐたから、太子は自己の限らない理想を趁ふために、何等の障礙をも感ずることはなかつた。年久しく自己の胸臆に包んでゐた夢想の數々が、着々として實現の緒に就くのを視た時、太子の感慨は如何に深きものが

あつたらうか。推古二十年の春正月、小墾田宮の饗宴に於いて、大臣馬子が群卿を代表して頌歌を捧呈し、『……萬世にかくしもがも、千世にもかくしもがも、かしこみて仕へ奉らん、をろがみて仕へ奉らん。……』と歌つた時の有様を想像すると、そこには偉人の手を待つて始めて赫々たる曙に達した時代の光明と歡喜とがあるばかりである。

二七、太子の死

太子の偉大なる統治も、終に結末に達した。

正確な舊記に據ると、太子の母君穴穗部間人太后は、推古二十九年の冬十二月二十一日の夕暮に崩御した。餘程の高齡であつたらしい。その悲歎の結果が過勞の身に累したものであるまいか。母後の崩御から間もない翌年の春正月廿二日、太子は正妃膳大郎女と同時に枕を並べて病蓐に就いた。上下の驚愕は如何ばかりであつたらう。周章の裡に、彼等は最早佛陀の加護に絶るより外はないと考へた。佛師靴作鳥は、滿腔の祈願を籠めて、直に造像の準備にかゝつた。併し、彼の手依つて端嚴なる釋迦三尊像が出来上つた時は、太子が此世を捐て、から既に一箇月を経過してゐた。

此時の太子の宮殿は斑鳩宮ではなかつた。斑鳩宮から南に當つて約十町ばかり離れたところにある飽波の葦墻宮であつた。所謂富の小川は、此離宮の西を流れて大和川の幹流に合してゐた。

太子と王妃との病態は益險惡の度を加へて行つた。飛鳥の小墾田宮からは、慰問使として田村皇子が差遣された。聖旨を奉じた皇子が、太子に對つて、此際何か希望するところはないかと訊ねた時に、太子は兼てから造營中である熊凝村の道場を、一日も早く落成させて貰ひたいと云つた。三日經つて、皇子は再び個人の資格を以て太子の病床を見舞つた。太子は非常に欣んだ。そして此時にも亦熊凝村の道場に就いて委囑した。臨終の床にあつても、太子の夢を徂徠するものは、弘法の一事であつたらしい。

太子の病態は愈危篤に近づいて來た。王妃や、王子や、澤山の臣僚等

は、深い憂愁に包まれながら太子の枕邊にあつた。此時、太子は多勢の人々に對して最後の遺誠を垂れた。その人々の中には、涙に濡れた王妃橘郎女や、聰明の譽が高い太子の第一皇子山背大兄王もゐた。

太子は云つた。――

『世間虚假 唯佛是真』

太子は又云つた。――

『諸惡莫作 諸善奉行』

この後の言葉は、特に信仰の深い大兄王の頭腦に鏤刻された。王は片時も此言葉の意味を忘れなかつたらしい。壯烈なる殉教の悲劇を語る上宮王族の滅亡は、全く太子が遺誠を垂れた瞬間に決定された。そこには太子の生きた感化の力を示す精神の光があつた。

發病から二十二日目の二月二十一日が來た。此日、太子に先立つて

正妃膳大郎女が薨去した。太子は戀て自己に來るべき運命をも直覺したに相違ない。偉人の死を待つにふさはしい静けさが猶ほ一日の間續いた。併し、死は遂に來た。そして四十九年間の燦爛たる生が終つた。中宮寺の繡帳の銘に記して云ふ。『二月二十二日甲戌の夜半、太子崩す』と。

私は太子の死の瞬間に於ける戯曲的な場面を傳ふべき何等の資料をも持たない。思ふに、其死は、偉大なる生にのみ課せられた總ての債務を滞りなく完済した人の、最も安らかな、最も平和な、しかも最も莊嚴な光景に充ちたものであつたらう。

斑鳩の富の小川の

絶えばこそ

世に、大君の

御名忘れえぬ。

太子の死の悲歎を永久に傳へる時人巨勢三杖の悲歌を讀むと、私は今も猶ほ白布を以て夜目にも著く飾つた殯宮の燃え盛る篝火の影に、靜かに帝王の床に横つた覺者の死を歎き悲しむ四民の慟哭の聲を聞くことが出来る。太子の人格と業績とを知るものにとつては、書紀が特筆する『日月輝きを失ひ、天地既に崩る』といふ言葉も、決して誇張であるとは思はれない。

太子の墓は、南河内磯長村の叡福寺の境内にある。所謂御墓山の全面に繁茂した椎と樟との古木が滴らんばかりの緑を湛へてゐる下に、わが絶世の偉人は、其母君間人太后及び愛妃膳大郎女と共に、安らかな千三百年の眠を續けてゐる。

二八、結語

不満足ながら此小傳の筆を擱くに當つて、今一言を費して置きたい。史實の上から見ると、約三十年間に亘る太子の偉大なる統治は、終始坦々たる道を歩んだ観がある。常に先驅者の運命に課せられる不遇と艱難とは、未だ嘗て太子の生涯を見舞はなかつた。そこには不遇の代りに王冠があり、艱難の代りに光榮があつた。連戦連捷の道に彼を待つものは民衆の歡呼であつた。これは何故であつたらうか。

太子の舉示提唱した新政策が大なる反對に遭遇しなかつた理由として、擧ぐべきものは極めて多い。第一には、太子の統治が始まる前に有力な反對黨たるべきものは既に一掃されてゐたといふこと、第二には、新政策の實行者としての太子の態度が毫も破壊的に出でなかつた

といふこと、第三には、太子の人格の個人的完成が時代と民心とを眩惑せしめたといふこと。——かやうに列擧してゐると、殆んど盡きるところを知らないが、これらの許多の理由の中には、新時代の指導者としての太子が、自己の時代を理解することが、極めて深かつたといふことも含まれてゐたに相違ない。

太子の時代は、決して營養の攝取に困難を感じるやうな時代ではなかつた。久しい間の鬱屈と沈滞とに倦きた民心は、期せずして何物かの新しい光明を求め、何物かの新しい高揚を待つてゐた。彼等は將に飛ばんとする跳躍者のやうに、ある力強い號令の下には、何時たりとも思ひ切つた飛躍をなし得る心の準備が整うてゐた。併し、かやうな時代に於いても、在來のそれと全く性質を異にした食餌を饌るためには、勢ひ多少の消化劑を配合する必要があつたらう。卓越した投藥者と

しての太子は、此點に於いても、時代の疾患を辨知する周到なる注意と、臨機的手段とを持つてゐた。太子の果斷なる一鞭によつて時代が新しい光耀の中に躍り出した時に、太子は其處に健康と勇氣とに充ちた民衆の希望多き未來を先見した。太子には狐疑がなかつた。躊躇がなかつた。あらゆるものが傳統の繫縛を脱して自由の天地に奔逸する欣びのみがあつた。

此點から云ふと、太子の事業は明治大帝によつて代表される明治維新の事業を酷似してゐる。併し、推古時代の文化が調和の土臺の上に築かれたのに反して、明治時代の文化は破壊の基礎の上に建てられた。推古時代の文化は宗教の祭壇を中心として起つたのに反して、明治時代の文化は戦場の劔戟を中心として起つた。前者には讚歎と陶醉とがあつたが、後者には叫喚と騷擾とがあつた。太子の態度は劔を以て

草萊を切り開くといふよりも、寧ろ光を以て暗黒を照らさうとするところにあつた。精神の力は恒久である。あらゆる帝國が滅び、あらゆる征服者の事業が單に記録の上の光榮と化し去る時代が來ても、唯だ精神の力のみは滅びない。此意味に於いて、偉大なる精神の發現ともいふべき太子の業績は、粘土の足を持つたコロッサスのやうに、作者の消滅と同時に滅びるものではない。

頑ななる頭腦の所有者よ。彼等は推古朝の燦然たる文化を撥無し、法隆寺のやうな堂塔伽藍の代りに堀立小屋を想像し、夢殿の靈佛のやうな偶像の代りに粗野なる土器を想像し、文物憲章を具備した政府の代りに蠻夷の王廷を想像し、さらに深奥なる印度思想の代りに幼稚なるアニメイズムを想像しても、猶ほ且つ胸裡の空虚と寂寞とを感ずることはないか。一たび太子の蒔いた種子を沙塵とともに一朝の風に

委したならば、彼等の眼前には、奈良朝の光榮も、平安朝の芬華も、弘法親鸞の偉大も、皆屢氣樓のやうに消滅し去るであらう。我國史の過半が單なる攻伐の記録と化し去つて、思想もなく、藝術もなく、偉人もなく、宛も土蠻の驅逐に委した朔北の荒野のやうな蕭條たる光景を呈するに至つたならば、彼等は彼等の祖國を愛撫するために、果して如何なる榮譽の冠を齎らさうとするか。太子の業績を否定することは、我國史の光榮を抹殺することである。(完)

大正十年十月一日印刷
大正十年十月一日發行

定價金壹圓八拾錢

著者 赤木 桁平

發行者 大村 郡次郎

印刷者 谷口 熊之助

印刷所 早稲田印刷株式會社

發行所

東京市淺草區花川戸町六五
振替口座東京四六九七五番

大村書店

大 村 論 文 叢 書

11	9	8	7	6	5	4	3	2	1
浪漫主義の世界觀及藝術觀	新理想主義哲學序論	美の原理	法律及法律學の本質	論理學の原理	藝術的活動の起源	法律哲學	宗教哲學の主要問題	文化科學と自然科學	哲學とは何ぞや
近刊	新刊	二版	二版	二版	二版	三版	三版	四版	五版
ヴァルツェル 文學士高橋 禎二譯	コーエ 文學士兒玉 達童譯	マールシャル 文學士相良 徳三譯	シュタムラ 文學士中島 慎一譯	ヴァンデル 文學士佐竹 哲雄譯	フイドラ 文學士金田 廉譯	ラース 文學士恒藤 克恭譯	トレル 文學士佐野 勝也譯	リッカー 文學士佐竹 哲雄譯	ヴァンデル 文學士出 隆譯
送料四拾錢 送料六錢	送料四拾錢 送料六錢	送料四拾錢	定價壹圓 送料四錢	定價九拾錢 送料四錢	壹圓參拾錢 送料六錢	定價八拾錢 送料四錢	定價八拾錢 送料四錢	壹圓四拾錢 送料六錢	定價八拾錢 送料四錢

398
38

終

